俳諧發句題叢

雲英文庫

イ4
3157
26(2)

俳諧發句題叢夏題目録

夏之上

四月朔
卯月
更衣 二
綿抜 四
袷
白重 六
夏衣
単物
青簾
筑摩祭
葵祭 七
施米
千團子
灌仏
花摘 八
花御堂
[illegible]
夏籠
夏花 九
夏書
夏断
夏行
煮酒
古茶
風炉
青さし
鮓 十
松魚
麦秋 十一
穂麦 十二
青嵐
牡丹 十三
芍薬 十五
罌子花 十六
花葵 十八
玉巻蕉

14
3157
26
(2)

玉巻芭蕉 十九　紫羅傘（イチハツ）　罌粟 二十　苣花 廿二
豆花　風車　石蘇　茨花
躑花　美人草　葉桃草　卯花 廿三
卯花腐 廿四　若楓　若葉　藤若葉 廿七
楓若葉　若葉花　青葉　葉櫻
実櫻　木草茂 廿八　木下闇　常盤木落葉
竹落葉　桐花　柚花 廿九　青山椒
枳殻花　楝花　繍毬花（テマリ）　白丁花 三十
藪椿　椶櫚花　花茄子　初茄子
茄子　筍 卅一　篠子 卅二　蕗
蓮　郭公 卅三　鶯音入 四十　老鶯 四十一

鳲鳩（カンコトリ） 四十二　鵜 四五　剖葦鳥（キヤウくし）　葭剖（ヨシキリ） 四六
鷹入塒　養鵜　枝蛙 四七　蟇
蠶（カヒコ）蛹（マユ）　蚯蚓出　孑孑　水馬（ミツスマシ）
飛蟻（ハアリ）　豉虫（マヒくムシ） 四十八　蝸牛 四十九　蛞蝓（ナメクジリ） 五十
蛇衣脱

夏之中

五月 五十一　菖蒲　菖蒲売 五十二　軒菖蒲
菖蒲酒 五十三　菖蒲湯　菖蒲刀　菖蒲打
薬玉　印地打　百練鏡　粽
柏餅 五十四　幟　割挿兜 五十五　薬草摘
薬日　加茂競馬　竹酔日 五十六　花菖蒲

石菖蒲　花且見　真菰刈　蓮巻葉
蓮浮葉 五十七　蓮 五十八　藻花　萍 五十九
罌子 六十　苔花　百合 六十一　紅藍花（ヘニ） 六十二
忘草　萱草　下毛花　金銀花
夏菊　紫陽花　瞿麦（ナテシコ） 六十三　常夏 六十四
石竹　擲釣草　馬歯莧（スヘリヒユ）　酸漿草 六十五
芭蕉葉　菖蒲葉　藜　的計草
苔草（ハヽキヽ）　十薬花　下葉　覆盆子
紫胡　棗実　蘇実　青梅
南天花 六十六　栗花　椎花　杜鵑花
合歓花　梛花 六十七　花柘榴　花橘
樗 六十八　山梔子　夏木立　若竹 六十九
今年竹 七十　竹皮散　瓜花　胡瓜 七十一
天瓜花　早松茸　早苗　田植 七十二
田植唄 七十三　青田　田草取 七十四　早乙女
採納涼　螢 七十五　蚊 七十七　蚊柱 七十九
蚊遣火　蚊母草 八十　螢 八十一　腐草化螢 八十四
夏蝶　蜘子　蝿虎（ハヘトリクモ）
蠅　蝙蝠 八十五　水鶏巣 八十六　水鶏 八十七
鵜川 八十九　鵜縄 九十一　翡翠　羽抜鳥
鴨子 九十二　軽鳧子（カル）　鹿袋角　鹿子
夏鹿 九十三　照射　火串　干穀

小綠　海老鼠（ホヤ）九十四　有無日　五月曇
五月雲　五月雨 九十五　梅雨　梅雨晴 九十八
五月闇　五月晴　虎ヶ雨　短夜 九十九
結安居 百　夏安居 百一　夏月 百三　蚊帳 百五
紙帳 百六　帷子 百七　辻ヶ花　夏羽織
薦為 百八　晒布

夏之下

六月 百九　水無月　氷室　夏氷 百十
氷餅　一夜酒　祇園会　嘉定 百十一
坐頭納涼　富士詣　鞍馬竹伐　半夏生
土用　虫干　夏日 百十二　暑 百十三

炎天 百十四　日盛　夕立 百十五　夏雨 百十六
夏露　旱　雨乞　雲峰 百十七
扇 百十八　團扇 百十九　汗 百二十　汗拭
拭衣　日傘　簟　竹婦人 百廿一
竹奴　抱籠　籠枕　涼 百廿二
納涼 百廿五　風薫 百廿七　打水　清水 百廿八
晒井 百廿九　麻地酒 百三十　心太　葛水
冷瓜　道明寺　冷汁　氷粉
水飯　冷酒 百卅一　干飯　梅干
香薷散　菽（マメ）植　漆取　枇杷
楊梅　李　林檎　百日紅

葉柳　夏柳 百卅二　凌霄花　慈姑（オモダカ）
河骨（カウホ子）　菱花　蓴菜　海松
蒲花　夏草 百卅三　青芒　忍冬
剪春羅（ガンピ）　釣鐘草　鷺草　風蘭
玉簪（ギボウシ）　鴨足草（ユキノシタ） 百卅四　蓼花　射干
紫蘇　青鬼灯　赤草　麻
藍刈 百卅五　綿花　葛花　夏菊
撫子花 百卅六　夕顔 百卅七　青瓢 百卅九　紅蓮
新麦　小麦藁　瓜　浅瓜
甜瓜（マクハ）　南瓜　[illegible] 百四十　鼓鶴
夏虫　螢　蟬 百四十一　蚋

毛虫　紙魚　金亀虫 百四十二　鮎
川狩　小鮎　鯖釣　海月夜
沖鱠　泉　夏神楽 百四十三　日折使
沛被　川社 百四十四　形代　茅輪
昼寝　夏痩　夏雲 百四十五　夏山
夏木　夏川 百四十六　夏海　夏氷
秋近　晩夏 百四十七　暑夏　晩夏立秋
夏雑

夏月涼し

俳諧發句題叢夏上

椿丘太筇輯

卯月

絹やれてあかなけゑの卯月哉　暁臺
胡麻ゝ子て牛ふりたる卯月哉　重厚
鶯の後見おてとよ卯月哉　五明
つくゝと見れはよるゑの卯月哉　卧央
鶯の巣の本にうつる卯月哉　斗入
まゝ山の宅にれつく卯月哉　恒丸
鶯の山路にくる卯月哉　蹊六
鶯に旭に小里の卯月哉　存亜
牛多く鳴る卯月の夕哉　平角

卯月

汲ゆ菜て山の根まる卯月哉　岳輅
壺ほつ捨て机の卯月哉　葵亭
ゆるゝと小川をまる卯月哉　菊也
旅人も草も晴の卯月哉　鷲笠
ふれゝと旭にそまる卯月哉　漫ゝ
山鳥の声と卯月は茶にあり　維咏
枕うつれ枕ハ卯月のこゝり哉　我サ
明さの垣のくゆる卯月哉　公路
木のみたけも落ぬ卯月哉　尾張 蜂祥
白妙てひらみ出る卯月哉　希言
みはなりみ世に卯月の花哉　有篁

更衣

名のるしにふるよ卯月の茶の匂　兄直
梅檀のほのめく白の卯月哉　菖之
卯月とて花に隠れし名ある退　冥ゝ
卯月来や能持白山の茶　爽北
咲ける卯月の?の花白し　七高
鶯をあとにおく卯月哉　梅岑
されゝく遠子去や更衣　宗瑞
流れ討み文嫁うりしを更衣　善お
痩膝の毛に激風あり更衣　仝
搗ほつ出かけに?し更衣　兎右
妻?しむかしのふれに更衣　樗元

夏なれや烏ハ黒う鷺ハ白し
大名ゐえんたてまり夏なれ
夏なれ只ハ弟あね太刀佩ん
酒呑の膝昼色やなれり人
くるきや狗ゑよおちき夏なれ
病人のうゞやこ良や夏れく人
夏なれ城の長衆かるうか
去宅を家毎に持て夏なれ
りのなれハ沸しおしのよなれく人
風さんハ発ハ来にけり夏なれ
山里やふさん去れハなれ人

合
百眼
暁慕
合
白旗
几董
鉄衫
白図
非入
又眼
吉川

夏なれ短しと母ハ笑んお
宝てそハ父の子の哭ん夏なれ
老やれハ短おもりし夏なれ
なれく松ハ里きのつまにけり
大ゐさハ子に譲けりなれく
月夜まで船ゐうれなれく人
子のく家を行きまうりや夏なれ
夏なれ表ハうつけて色にけり
まってハ人ハ乏りし夏なれ
柚の汁ハよは春まうし夏なれ
蝶ゝを誘まけやこゑし人

松兄
士訪
桂又
非六
瑞六
眉山
成美
合
浅糸
可執堂
合

松とこの灸ハ字味よし文花
花の根つゝ松そ子のさくら哉
人井に旭さんうり文花
男に深ねうちハ洲きゑ文花
携人ハとゝすゝすく花ゆ人
書やなよ子や松すゞみし船の文花
老しけに旭のうつりや文花
つゐに松山おてこんなり人
花ゆへて舟さしになり杜若
ゆくと文ハおれなり文花
大方よりゆ前の先に文花

大阜
乙二
仝
岳輅
道彦
月居
蒼虬
祥禾
亜渓
魯隠
雲旋

花ゆへていてゝゆ人をよすれなり
文花ゆやうその毛のはなし
白芥子と紙さくきん文花
人らしく人もゆなり岩花
吉野れゆるんや花ゆ人
岩の夜のはるりと根すり文花
ゆふまへて牡丹咲らみ被なし
松ハ世のゆすれなく文花
り灯を土見へ松れして文花
花ゆへて女子にふゝくえすれなり
菩のさふみ夜にさはりなり文花

陸奥　吾石
葵亭
芳笠
一茶
菊也
三河人
似藻
世竹
信濃　春耕
古文
伊勢　宥名

綿抜

袷

聖ゝ鳴学一笑ん更衣　（甲斐）大年
更衣おりんハ生ろ多ハからし　路丈
更衣ミ肌暗辛かきのとゞろ　（摂津）実川
たれかハ月にまされん更衣　（下総）汶星
綿ぬきやさしかて哲兄の帰しき　（女）子代
綿ぬきんくよて卯月二日哉　白旗
綿ぬきやまや乾てこそまき耳の穴　祐呂
綿ぬきやそれ其の乃み業や笈の陰　蛍嘯
曾孫を叩てみたる袷哉　思酔
さまよ人おんと例に袷哉　几董
るの巻にゐくまゐる袷哉　仝

小襟より針指り出ル袷哉　仝
袷着て御ゟ花折人の哉　白饒
学ゟ粽餅によきん袷哉　業兆
袷着てまつ指け酒の弟子　㑹員
初袷をこみかんもてよく　如毛
袷着て竹やかのと喜ゟ　（下総）（女）斉世
笠の紐みつさる袷哉　祥禾
袷着るらを苗代に出て来り　一草
流るも下袷着るらおまゝる　道芜
袷着て光兄の旅や安宅丸　仝
初袷袂にゐんまり嬉し　堀州

浅妻に墨引れたる袷かな　平角

袷きて又入道に似やもし　長高

尼寺のさびれ見ゆる袷かな　冥ゝ

道芝のちれさうな袷時　武蔵　几白

袷きて本読かゝる手元かな　羅風

心を出て見ればさつぱり袷かな　文角

初袷作り花さへ葉と成りけり　河内　達宇

袷着る子を湯の子に成りけり　弁古

あちこちらちらと見ゆる初袷　浪花　古逸

袷着てゆつたりしたる親子かな　江戸　久蔵

袷着て心淋しき夕かな　下総　香風

白雨
夏衣
単物
青簾

白雨晴るゝ参詣に手のもたん　菟古

白うさや夜来にりとはや雫り　芦涯

白うさや一間くれなや明ん　湖花

菊もし人の夏衣のこゝろかな　丹波　麦鶴

巻の眼をよしみけり夏衣　ノ旦

さや豆みれば数は色や単物　三保人

旃蒼や洒くしめたる青簾　白梅

表裏むりておふて青簾　仝

仏光を恵のはしめや青簾　菟古

営みのけふよりそれ青すだれ　順丸

萩挿て夕暮かゝる青すだれ　仝

十日立て十日ふられぬちち鍋　古川

麦恋ふ人の川わしや古き鍋　道彦

名れ家や那は鍋みえ古はうら　一葉

古鍋隠す人も憎からん　淑中

烏帽子て飛烏帽子見せ古鍋　柑翠

古鍋かれ抱ふかけるはそ　素迪

又ひも残てまうし古されは　李尺

常よりも入まきやし古鍋　（摂津）合貫

身をこらしたれはるかに古鍋　乃逸

新法師のまさつる下鍋祭　祐昌

筑摩祭

老能ちゝ年良や筑摩の鍋の数　（常陸）知廣

小日ろや筑摩祭の鍋の尾　（壺）麦泉

葵祭

古鍋といはれて安き祭かな　護物

見外みせこに葵の祭かな　樗堂

下この下の年もしも葵祭かな　暁台

許凡を持ちも数し葵草　葵左

わすらけれ葵かけたり兜の纓　宗讃

りやうけ葵みゆるは動く　保吉

拾ひあげてみれは葵の付はらぬ　岱青

五ツなびけて川瀬の流れはきむく　魯堤

頼尚に古年みつる祭かな　云堆

施米

人よりもむ故米の場の子いそれ　宗讃

千団子
ほとおれ気ハ甚だうけふ団子　謡鳩

灌佛
灌仏や二本の指ハさしなから　魚酔
産湯かけし仏にかゝる旭かな　闌更
灌仏や夕へハ峯にかゝる柳哉　蕉左
ちる花を見ぬ中に生れて仏かな　素蘿
霞の花はさかりなるや仏生会　白旋
灌仏やつゝを出れハ葉の木原　合亜
灌仏の花ぶさやはとハ注すれや　存亜
筆と一度にそたつ仏かな　松兄
天竺の甘茶は仏の産湯かな　完来
肌脱て着さする世や仏生会　成美

うまれしハさくらさくらハ仏生会　道彦
灌仏や父の生れし日も看つる　蕉雨
多くて仏の生れけれなり　同人
松風の子の子も吹や仏生会　紀伊 似斧
灌仏や世の后家を見るとや　女 斉々
灌仏やもしも一わん咲そめて　土佐 瀾江
本をまうして生れる仏かな　越后 錦山
灌仏や常盤木にかゝる墨の月　一水

花摘
取ることや花摘児の松を出る　天外
君か代や四百八十花御堂　鳥酔

花御堂
花御堂詣すこともなかりけり　蕉左

花咲垣屋かたへくれかゝれ　暁甚

垣根のよそにして卯咲垣　百明

そこをかれしことを逃せ卯咲垣　古明

跳たち中ねられかし卯咲垣　横雲

笋躑躅

見れ巻れ見れぬ笋みてし卯　（北野）金波

ハら花今跳ゑてしほれすら　芦江

夏蠶

夏に蠶乃んかハ養んし卯　白旋

夏蠶の人に音ききく数卯　年丸

夏蠶や忘て掘に怒多　宜麦

けふりや夏ハにきしの卯ん　（江戸女）呉衣

夏蠶や人の其たる能の春　（卜琉）至去

夏花

読みそれ書にすむる夏花卯　白旋

今二筋夏花久と田ふ引と　乙二

夕暮や鳩の小桶の夏花持　一葉

葉の能のかゝる夏花多れ　護物

夏書

夏百は墨も幸ゐ行うれ　蕪村

ひとこゝて冬ふる筆の夏書卯　合

其のふ筆に良に墨つく夏書卯　几董

仏るゝにかりかりたる夏書卯　大江丸

在子みるゝて夏書の机多れ　諸昂

夏書もん強ふ琴の素素　乙二

うかふ人の夏書にくはし硯卯　士高

夏書

紅良にうけまされたゝ夏書かな　一桑

笠の戸や十一夏の筆の挽雲　葵亭

其の中に昼寝はいとれ夏書かな　越中 梅此

夏行

夏引きん必人をそしらす　重孚

鉄炮に訓ては戌し夏百日　蒐左

醴酒

濱醴るや松代の茶屋聴る門　京 久風

古茶

机据て古茶捲出に壺の底　近江 田札

古茶の名人にまさるれ此来　東卿

風炉

風炉手おすしき茶巻たらしかな　江戸 百川

其向へはたくみあり立風炉茶かな　丈左

青さし

青さしの青はあれし犹走かな、　梅居

節

笹こしに青さし白やとりかな　向桂

はられとし菖旦の節の壁、　貞佐

凄かれ石の枕や一夜節　宗瑞

いはれし足をいひたる節の暇　葱太

菖に家並まて長し節一世　仝

節つけて謡待としかるきかな　保吉

浮世節謡れはむし去縁に　沙羅

節かれよ松をとらへてとるうち　乙二

贋節や母ゝ皺よのよこかみ　篤老

竹の月さや節菜のくるれそ、　尼 素月

家山のなよりとある節の旨　美九

松魚

跡志るハいつ先や浦の音　丹波 素涯

活て来る東の風よるし初鰹　多酔

板の間ミ付る人よ初松魚　暁甚

地を走る声よ其関し鰹売　今

貴来よて傍らし初松魚　白旗

西向の妻ぅらす方や初松魚　菟太

夜して見送に配られ初鰹　今

見かけや松魚の背欠後の筋　百明

をしさや端唐のそく初松魚　保吉

初松魚下り役者の風体哉　以足

是晴の下をはしるや初松魚　暁丸

草の戸や人の恵みの初松魚　楞岩

うけ其の関に出る松魚哉　五旗

手に提るハ其いそげ初鰹　一草

板爪さく音てゝるを初松魚　道売

初松魚気に乱花の恵みあり　杏卿

見る方の松くれ鰹に月夜哉　一茶

曙ハ夜の花ぅり初松魚　学笑

分おもうくえられ多り初松魚　旦々

帆柱の中やがみの浮かり初松魚　三保人

同甲ハ成し松魚ハ高ハたしし　相模 洞之

麦秋

麦うちや大さをきよく笋の先　蝶夢

傾城も狐追ふなや麦の穂　秀朴
病人の噂も色なり麦の穂　仝
旅寝して見るや麦にも秋の暮　蕉石
乞食せん世はあらでも猿麦　仝
青闇の気中より飽麦の穂　暁臺
麦の穂や赤ふ見えしもしれり里　百明
麦穂や垣の中を蓬戸数　几董
麦喰のある蒔似りや琵琶法師　仝
黄昏りの袖や袂に麦の穂　淅江
麦穂や帰りに入りもし反　琪道
田を捨て後に麦刈山辺哉　樗堂

穂麦

麦の穂の星はひろがり月夜かな　（陸奥）白居
麦穂や見れば花のひたしく　岳輅
枯木にも千年や麦の穂　木海
焙麦の大戦気に麦の穂　（武蔵）二川
旅なれて夕日のさすや麦の秋　（江戸女）梅枝
麦秋をそつきれしや孫巻夫　（出羽）淋山
麦の穂を葉のうらむ戸に哉　樗堂
窓とふさつかれは穂麦哉　烏嘯

青嵐

荒破やりなかけて青嵐　蕉た
山の辺や天草捨る青あらし　白雄
しきし麦の嵐をうちかり　仝

青嵐湖ハたゞ蔭に落るかな　保吉

弓持の笠みゆるとまた青あらし　百昭

麦刈の手にとゞまりて青嵐　房　麦二

むしろ干てたてハ真ゆく青嵐　士朗

砂村やまい東風ふく笠のうへ　恒丸

田の草のさみだれの毛の青嵐　李大

立さわぐ苗の花の青あらし　大阜

地引する藪のしめりや青嵐　道彦

青嵐ふく十小湖の藁くずまで　仝

筋違の小村へかゝり青嵐　其雲

関ゟの通れといふて青あらし　江戸　寿鶴

牡丹

青嵐起出て見れハ葉なりし　信濃　路人

青嵐簾の紅出れ襞うれ　江戸女　琴糸

情壷に吹よりよりて青嵐　浪花　嵐谷

花葉て月を抱たり白牡丹　暁甚

百両のちきさ悪燃る牡丹かな　几董

蓋くろき貴を静る牡丹かな　百槐

牡丹切て宇の表へし夕かな　蒼虬

ちりて後待れたつほたんかな　仝

白雲の穴ゆりそて牡丹かな　仝

うるさりてゐ掴れ牡丹かな　葛老

一本の花咲てほたんかな　大江丸

比頃は人まさるほたん哉　仝
夕深まりし牡丹は八重葎哉　松兄
ほられてゝし庭の牡丹哉　希言
咲人をまたぬ数はちる牡丹　祐昌
とやくと牡丹つりとむ塀の内　士勤
宵の叢から参るほたんかな　遅月
黄はん見して白き牡丹哉　木僊
いちの姿こしのうこく牡丹哉　巣兆
牡丹好んやけれすゝめたり　江戸　亀文
咲出て山のふさる牡丹哉　成美
白牡丹ちる時雪はかりなり　一醒

身を添てつくゝまる牡丹哉　芳之
君園に入てしらけき牡丹哉　芳成
さりれ草は霧かし白牡丹　仝
散風はちるや牡丹も光る月　冶嶺
花蝶を喰んとしたるほたん哉　辰誌
あつさりと夜は露つく牡丹哉　一草
京の霧落うし情し牡丹哉　乙二
花は京の葉ふしたゝぬ牡丹哉　月居
日暮ては小さき花の牡丹哉　岳輅
花ふさつやそよれなふ牡丹哉　只丈
ある人とゝ花なるは牡丹かな　月化

横町の地車近く牡丹かな　其雲

ふつゝりと落や牡丹の花の末　蒼虬

浅山のくしまきもかね牡丹かな　孝劉

一輪の牡丹散り花になり　蕉白

くつろきし又毎日のほたんかな　雲旋

志つかさを人にあつけて牡丹かな　蓑亭

草家居の潤かりし牡丹かな　鶯笠

客絶て昼も志つけしちる牡丹　長高

牡丹さくと聞て其の葉を近く　陸奥 麦洲

下枝を押つけて咲ほたんかな　蜀也

黄にさくねまり牡丹の不足かな　三径人

白牡丹咲て十日をりちれ月　女 志宇

町人の疲るなりぼたんかな　秋支

牡丹ありて人は人なき山の奥　卓池

ちる花のよしふくれる牡丹かな　秉紀

白牡丹風を抱て崩れたり　碩布

戦ひされけそれ牡丹に志らかし　呆鎔

砕されて蝶のそこれる牡丹かな　居然

ちよつとれに鋏つけゝる牡丹かな　尾張 五竜

家やらのをより白き牡丹かな　秀頂

牡丹咲て僧は気を起しけり　松呂

見とゝるや白き牡丹の素折そ　美濃 丙子

芍薬

たのまれて来てハ淋しき牡丹かな　丹波 霧井

蝶ゟもの噂あり牡丹畑　尾張女 三糸

ふむやをしけとうしに牡丹芽　駿河 画牛

牡丹咲と覚て寛き女の衣　参河 桃序

白牡丹樒の詠の後に見　伊豫 其松

賭りして碁にとられたる牡丹かな　汝南

旬の日を大事に着る牡丹かな　安藝 菓隠

花といへハ牡丹よしある夕かな　若狭 勝行

いかにて牡丹生てたよりハなきね　大節

芍薬に北ゟの歌ハなかりけり　白旗

芍薬に網戸つくる庵かな　伊勢 宣笑

燕子花

又六代芍薬つくる山家かな　士朗

芍薬や籬に鶏うくはけ家　道彦

芍薬にたのしうする蔭かな　素檗

芍薬や夕ハ木蔭の小さかり　鶯笠

芍薬や牙おとさぬ花鴨子称　尾張 掌叟

芍薬ハいかなる玉に咲たるに　上総 尚山

手とるに久巾沙あり杜若　柳居

見まうしや道々一先く杜若　暁臺

人々の扇あさらしかきつはた　蕙左

杜若橋をさいて咲まかの　仝

仮初に見てもやさし杜若　樗良

旬に人立しとまつや夜あける　白樵
宗鑑に交れよとめつ杜鵑　保吉
まし乃きしのふや杜鵑　李蘿
杜鵑おれとおもふ花ちりし　希言
あけ一声谷をもとまりける　湛道
杜鵑やさしかな花のりかとふ　存亜
船風やたゝ今鳴し杜鵑　呱丸
杜鵑声や夫や甲一枝　能登 寒崖
ほとゝきすいつまてつ乃ふ杜鵑　成英
杜鵑夜もおるゑはうちけり　蒔笠
杜鵑白ずかて世をし侘るさま　之顧

船の旅ハ旅に眠し杜鵑　甘谷
垣るみをとんで来るや杜鵑　可部里
人々けのうつゝねるし杜鵑　一芳
手にもてハよし絶れは杜鵑　道虎
学の存言のうけにとまりける　仝
高ふけや文に隠しける杜鵑　箕亭
縄の花ハ咲きけり杜鵑　義扎
投入てまくをとんかや杜鵑　魯隠
人につゝいて麦刈けりハ杜鵑　雲樵
杜鵑声てハ人に来されけり　樵陶
生れ自にておもひかしの杜鵑　共鳥

杜鵑山を出ハ先に啼せける　寒松

大庭の晴るやなかつける　申高

あけぼのやおりと飛く杜鵑　万和

たゆらし二人ハ沸し杜鵑　菊也

まよりて也る千代の杜鵑　武陵

あちに来て小雨沸しや杜鵑　女 志宇

杜鵑酒呑比の為を　護物

遊子花今さく咲らんに杜鵑　子影

杜鵑山路頼ふ乱まれし　頑布

杜鵑白き九月旦夕乱　亜濱

なる着暁に見えまし杜鵑　尾張 秋麿

嬉しさにひおそこれたぬ杜鵑　漫て

定めの船くらく杜鵑　鶯雲

鳥帽子着し女挽り杜鵑　尼 素月

船のうち人ハ来ぬ之杜鵑　郁賀

四条の芝へやまさよりかへりける　小尼

良の鐵の花につれなし杜鵑　江戸 芝山

杜鵑同りとさるもん船頭　ゝ 雲巽

盃のちんさかきるや杜鵑　肥後 可来

月のやゝほとさかり杜鵑　丹波 野揚

船やけれるを奮ふやなかりける　江戸 玉光

樹のやさに搬つる家や杜鵑　ゝ 鷺雲

花薄

朶のつよい坂のすゝきかれ乃り杜若　甲斐 才馬

逃ゆる花みらんとする身に二ツ　浪花 栄女

素に得し隈見たるもふやけり　下総 道呂

赤きは流れゐして花の霜さ　大和 杜口

君が代の軒に逢ふて杜若　甲斐 超氣人

日に日にかれて咲きみだる薄　闌更

子を抱く露の色やたちすゝき　保吉

露の戸や日数へることゞ花薄　江戸 椅人

と転がれ八月八日の花薄　月化

穂にまだ見えぬは白し花薄かれ　下総 东鶴

玉巻葛

葛の葉の裏吹き下ろす嵐かな　暁台

玉巻芭蕉

芭蕉へのなこむ夜の芭蕉かな　学笠

鳶尾草

いちはつや花の郭を住むころ　吉川

若鹿やふみこえ行きし軒の白　虎来

罌粟

玄職に刹れおとちる芥子の花　攝津 縫隣

まるかちるしく倒れ付けし芥子哉　闌更

地角の嵯峨打たしの昼かれ　仝

白芥子に隣てあるき自ら哉　蓼太

蝶はまぎれてしくしの咲けり　仝

陽炎に似ゆる芥子に一重哉　暁台

芥子花にふかれて舞うちゃちなかりし　白雄

芥子の花まぶ子の人ふるえあるれかな　蕪村

廉を追ふ垣にけしちる夕かな　保吉
何そのけし咲畑に鼻ふるゝハ　嗉美
けしの花うけとりつゝしすゝみかな　大江丸
天は風走しらぬけしの花　仝
けし畑や垣の外より汐見え　岱青
白けしのとしハ見ゆる小家かな　希言
なけしの端に冬き小家かな　有堂
けし散て夢径を踏る月夜かな　恒丸
松かけや忘草にハけしの花　士朗
あらし過て又咲出たりけしの色　仝
一合のけしや宮の渡に花盛　文晄

けしの花はむすれつるそいさき　呉山
咲けしに味噌汁煙よ女かな　長翠
なけしに光余りたる月夜かな　青蘿
見て来れハひらハちれけしの花　樗雲
その宿に昼さやしけしの露　棠兆
あれ日やけしちる庭の風あり　成美
人見えうしやけし咲山の家　仝
うしろ来る家のくゝえけしの雨　尼 白麻
浅月出る半ハ散れてけしの花　兄直
白雲の空ゆくけしのさかりかな　完来
なけしにたゞ湯気のうつろかな　可都里

けし咲や主のいひよきけしの家　仝

酒の酔によふてちれやけしの花　葛三

けし散て高く秋なりぬるの元　百萬

押ならされぬけしの蕾ゐ　乙二

咲掛ふ年のもはらけしの人　尺艾

花根かえかれたん迎へされや蕾よ見　石老

浜風のけしにあれこむ霍ゐ　仝

村雨やけしの方より晴かゝり　一学

けし咲て小高くこんゆれ高き家　仝

芥子の花のおほらし花見り　月化

花けしよそふえし村の人暮の内　塊翁

芥子にさへかゝくし麦の穂　岳輅

風月に古はしいさようけしの花　仝

花は散てつぬつけしのちる　蒼虬

雲ら帰やおちれけしの咲にけり　一茶

芥子のさはらぬなかる風拭き　長翁

朝月夜見の身けしの花　寛松

松げやけしの蕾のうごき哉　寿閣

寿有やたの心坂こけしの花　椿堂

とうかてようかて寿てけしの花　雪擁

蝶の羽にちらこえをけしの花　女 阿さ

子を抱きの月すぐやけし畑　蕉雨

何花もちる時ハちるなしの花　菊也

葉を出て枝になしの花に　三径人

咲初るなしや孫首猶古そ　芝蕉

鶏や花宿中のなし　炯　近江　文常

なしの花筆にふくむ花びら鉄繰　京　其成

白なしにさき雷のとゞろかね　陸奥　東卯

花なしや村人ハ先手の籬の外　尾張　谷即

白なしに眠をすまし月影邊　阿量

梢の折についてまゐるやなしの花　蒼嶙

まろ島のさしもと花やなしの花　李尺

松風やさらく付やなしの花　常陸　祇嶋

苣の花
蠶豆花
豆の花
風車
石藤
萍花

人よりも腰ありなしのたかさかな　京　漢弓

うまれたる蝶のまされてちるなの花　蝶夢

蝶に負けやうてから豆ハ花ざかり　嵩笠

詠てすゝむ香や豆の花　青蘿

塚にハ夢むすぶもし風車　越前　巳文

いそ茨や流とともに八せさ及れけ　越中　一庸

ふ萍古ての花に似さるに　芝村

茨流て息につり咲萍に　今

よしし萍の花埴流家そ　保吉

朝なれ煙たつく萍に　蒼帆

花萍出れ蕣なつき色　力化

罌花
美人草
茶挽草
卯花

夕されも仕舞ふてんと罌の花　左亮
卯の花は中々けしも荊の罌　岳輅
ちるさるは淋しハまさすれ花罌　等笠
雛唄夢ぬ声にひてく花の罌　守之
是や中やそれと寝花つとりふ　江戸 對山
裏つれ垣方へかゝり美人草　安藝 其滴
蝶々も迷ふ笑之美人草　可友
花々もちちれ々や茶挽草　陸奥 両考
卯の花が中ゆく蓑の雫ふ　暁基
卯の花や笹をさへて乙女の濡　白燈
卯の花や打ての夜の曇光　仝

卯の花の艶ハまきさ天窓に　春亜
卯の花はとりまり明き小家に　恒丸
卯の花もさして垣ゆふ男かな　士朗
跡見て卯の花つゝむ夜かな　樗堂
卯の花を粉れはみてる嵐かな　巣兆
卯の花の中から出たり夜の人　成美
いかさうき卯の花垣の夜あらしかな　完来
卯の花の卯浪たつる帆をかゝせ　祥木
卯の花や櫻の夜よりすさましき　可都里
卯の花や又気かけるゑら乗る　仝
卯の花の咲る沢を降れり　一茶

麦ふみし人はうの花咲にけり　乙二
庭なしてうの花垣や田一枚　乃克
烏帽子来てうの花折しむかし哉　仝
うの花の夜月ハ影し白家哉　蒼虬
うの花や絹の目切と学も　一茶
庵の後卯の花ふきし山家哉　魯隠
うの花の残り添ひ夜の月　梅閣
うの花に鷺引あけて去したり　亜渓
折て見て手まりこほれや花の木　漫之
うの花をとふごし氏来の餘つり　筑後 東詩
ひなのみくはりゆけしかな卯木　陸奥 案吟

卯花腐

うの花はうかれし春もし哉　上毛 川二
卯花や闇も月夜もかれしろき　備後 一冬
うの花やとくこほれすみれ声　三河 其桃
うの花や竈の夕かきくもり　山城 葉居
うの花は明る飛し鳥てん毛　多能女 考園
うの花は子良のうせし雀哉　左節
雪の名の顔てうの花くさし哉　百川
梅の日はうの花くさし小なる哉　條吉

若楓

紅くの折てしなりつる楓　眉山
思ひよりおのふゆしや若楓　長翠
夕暮はてなもりあり若楓　菖二

里の子をよそにて畠の若菜哉　蓼太

青もうく若菜は蹤る畑白哉　仝

山の係みて小舟漕り若菜哉　蕪村

葱の畑み横すのはる若菜哉　仝

木々の名の若菜は遠し家の哉　白雄

若菜して鶴の声ある去年哉　百明

河北木花ちらへい若菜哉　（ナヽ）保吉

傘に晩ふ分よ若菜哉　岱青

留主のちや若菜白を指うちら　素碕

一跡をたてたゐり山菜摘　斗入

しの本に青菜つけ先の若菜哉

鶴青に帯ひきしつゝ凧　（三河）青牛

いつ凧落る洗濯干場頃　乙兎

つゝ庭と櫛へ白も見ゆ凧　蒼虬

鶴八荒も櫛かりしつゝ凧　（讃岐）斗沐

明星の一つこれとみやつゝ凧　（安）文菊

鉄砲の的うちらや若凧　素琬

うちまるいれも山されば若凧　湖中

若凧見まつる名の若うるゝ　（伊予）竹哥

山やれにさけるやてつゝ凧　（上総）桃丈

守り得ふとゐうりつゝ凧　春暁

鶴年をまりぬる若菜哉　闌更

若菜

若菜

これやまて豆腐やめてうなひけ　存亜

塩をみて見しられるの短夜　希言

ふはくと膏ゆかるの短夜　恒丸

朱戸の飯くちあるの短夜　士朗

ようくと淵の夜迎の短夜　仝

戸口まて小ころ来て鳴の短夜　淇道

涼すゝ先へ来て居るの短夜　陸奥　八風

差しるみるはいうしの短夜の机　桂又

傘のちひさくあるの短夜　業兆

そろくとみるの花かりし老木に　椿雲

戸口から山路の夢ある短夜　長山

新ろのなしらぬ寝るの短夜　百雲

いにのまりうれしの短夜　成兵

ふところへ風のはいる戸短夜山　百寿

花薊は短夜ちいとつる羽蔵　若里

寝るのまなきりし裏の短夜　奥　心求

権てむそくあまりみの短夜　乙二

の短夜ふつや鵬打るの背　仝

飯風をとるれさはれの短夜　雪笠

花のさしまるの垣みしの短夜　長高

肉に居てれりるくさむの短夜　等老

蒲かれるやの短夜飯嵐　堤雁

の花してまゝにまくやれ枝に　一茶

子芋のつまりと落るの花に　寒松

捧さしたゝの花暮りゝ鮫のうち　雪挍

椽の花妹しおのゝさゝりし　笠庵

ちるものゝ月よりもようの花咲　卓池

蔓豆や白の花は宋影　秋挙

影凡の戸口吹きりもの花の丈　漫之

手芸人をえりける花に　星讃

あけそむうしや花の流の丁、　雑喙

紬にうく汁や花の行時、　成蹊

舟の飯舟り豆への花法、　豪之

旭さし家の人ちるの花に　女 濱藻

戸明れハ白の降るの花に　筑後 其成

猫の目も昼に来るの花に　君崔

ゆくものにはしれやれの花に　信濃 乙棠

松毬の流よせるたの花垣　陸奥 一柳

やれ屋の有しけ余るの花に　伊勢 巨洲

咲つゞく茨の花に　斗入

椋の花ほ鬼も屋様時　似藻

ちる花の庭さし阿るの花に　出羽 洪之

子祝日月ゆつるもの花に　浪花 李友

菜を費て咲いたもの花の咲あり　孔棐

藤の花

柿の花

の花苑

麦 蒔

葉桜

葉桜やまさしき花のさかりより　暁台
葉桜に風のつよさと忘れけり　江戸 一雲
葉桜や世にふる人の出ありき　巴兆
葉桜やそれむかしやぬ人仏　董雲
葉桜の大宗すゝや池の上　子影
葉桜や牛のふとれる片山家　奥陸 麹平
葉になれハたゝひと色の桜かな　柑翠
葉桜の気ハ手のに移れけり　江戸 菜静
春よとて清葉桜の上をとり　一箒
来てみれハ夕の桜実となりぬ　蕪村

実桜

実桜や果ハ雀の喰れけり　紀州 一路

桜の実小町か寺にひろはれけり　摂津 蜀房

木草茂

さゝいや人も来ぬ所さへ茂りけれ　璞芙
出山の志らに入し谿かな　武蔵女 星布
木に蔓にうちて茂るや翠の穴　道彦
湯泉臭なれ別て茂る名やし苔　星麿

木下闇

下闇や椎の葉かゝる雫なまき　白雄
彫のあとまれぬるし木下闇　祐昌
下闇に生まれ小猿か解かな　一醒
むれゝと人ハ去し木下闇　訥月
下闇や物のありく小草原　巴兆
何虫の蝶かまつらん木下闇　公

常盤木落葉

涸魚ハまさしさはれや木下闇　京 貧僕

碑を杖ていふや木下闇　下総 斗圃

常盤木の落葉によって静さ　菊三

楠ちるや七ツやりの古跡より　乃尭

よきは木の大さかる落葉かな　乙二

松ちるや大河にうつる底根の上　陸奥 李光

美しき松の下落る猿の上　康人

鳥ハ絶遠出て松ふちる　安藝 逸史

竹落葉

ねふるさん出て掃竹の落葉かな　護物

桐の花

色に色に桐挿して花盛れ　暁臺

人やそて十とせ余りや桐の花　保吉

杉むれ出の玉の井さへ桐の花　仝

花咲ぬ七度切し桐の木に　路人

家の洗ふ襟に落かゝり桐の花　越後 松魚

柚の花

花と枝ハ実に色なる花柚かな　蓼太

先小柄巻てその後ぞ柚かな　仝

花柚かれうへて戻の籬かな　白樵

狭うて遠気を待る柚かな　年心

柚の花を疵目に来る玉子買　上総 白老

柚の花に許く露にこぼれけり　陸奥 更仙

柚の花やひとつ咲ても家の数　北岱

柚の花のあふす香むら影の妻　女 きく

青山椒

白はなる青山椒や窓の雨　加賀 正方

枳殻花

家鴨等に枳殻の花のこぼれけり　陸奥 志順

柿花

柿の花ちるや端居の山家集　江戸 改二

何事の数にひろひし柿の花　東嬌

菜莚に色をのせたり柿の花　樗堂

椎の花の真をつゝむや柿の花　寄岡

渋柿のしぶく花と来にけり　一茶

柿の花ちるを箒とをりけり　漫ゝ

渋柿やありしすみれの花ヶ咲　武蔵 可布

麦飯のくろきに白く柿の花　光節

繍毬花

小でまりや垣をあちこちへかけて咲　出羽 壺井

白丁花

さふらひの家や江角に白丁花　尾張 一玲

玉あれはちらく眠し白丁花　武蔵 班象

義桔

世の中にさかりし義の桔ゝ風　馬逸

椶櫚花

あるかなる椶櫚や宵月夜の嵐　五明

しゆろは花まされて気之　常笠

不通字れ咲まへしゆろの花　美九

花茄子

あすも見ん初花茄子家茄子　万尭

花茄子またれちらし翠之のみつれ　岳輅

初茄子

くるまハ宵の露て初茄子　貞佐

京へ出て秤にかけれ初茄子　吐月

初茄子桂れさきる色こゝり　尾張 寿山

茄子

しらすまん聖子やまさん初茄子　一草
初茄子取らる花の咲にけり　仝
花と見し日々かしさに初茄子　護物
鳥羽まゐの大江茄子はちぎりけり　岱青
うちまさる其の数はや小茄子　又明
有名し茄子は蕪の隣　長翠
茄子見ては文ハ中にて西向き　成美
飯良に似たり茄子は一夜漬　其半
筆の穂の葉内や茂しまし　蕪村
たけのこやおはりせて亭主なり　蓼太
竹の子や庭にわつく八市道　晩甚

筍

竹の子の枝ハ遅きにてなかりしき　保吉
たけのこも見えて見て見もの音　重厚
竹の子は右風つよき痩脇　又明
竹の子は月見るほど青みけり　存亜
竹の子や二本並へて軒の月　寸来
賊されし竹の子まりに似たり　士朗
竹の子やまさる下又人は芽は雫　仝
竹の子は引深みて出る梢かな　桂又
たけのこは常よりまさる梢けり　恒丸
竹の子や傘張深へて礼返し　沙羅
竹の子やたなはしのより射て　成美

竹の子やまより節して經りしき　素架

子はすりて移しおれや竹の親　乙堯

竹の子や壯見る子の移ふなし　蒼虬

竹の子や世にすむ人の月を友　桂堂

竹の子も屋そふ風やね百の草　菖三

笋によりしつれは竹しの白　雲稜

笋は露のうちなるちりぢり　一葉

笋のうちは陰にのきりぢり　亜濱

笋のたけ抜はねて里ニ竹　其雲

笋やはらはらの主は末も　井眉

笋の見ぬ方に妹が有るもね　甲斐　素山

篠子

山陰の石の竹も子は生ふ風　秋長

笋やふるふるものは芋の蔓　鉤風

あれあれと家笋にかかれけり　下総　研石

笋や月夜流れて迄かれし　女　應て

笋ともやそて新端に支にされ　尾張　琉風

親の目前なれし笋なれ　鶴観

笋はすてて話をやく岩ね　江戸　泰人

笋やけしおそてつる家の石　紀　天乃

笋や篁に拾てやまつ　旭丈

笋や叢虫はものをいつ迄　去節

篠の子は妻気色の数ね　陸奥　鬼言

蕗

卯の花のこぼるゝ蕗の広葉かな　蕪村

蕗の葉ハ無底にのれて夏の雨　（備後）愚軒

蓼

しのゝめや雲見えなくに蓼の雨　蕪村

漏新の雨に焼し蓼の露　召波

小町て垢ぬくや蓼の露　仝

蓼ゝ生をとりたり庭の蓼　素迪

葉刈てん一摘かゝふ葉蓼かな　（讃岐）長白

老嬢き雀の声や蓼の雨　太笻

郭公

渋壺へ柴刈入んほとゝぎす　悠心

杉の子に下枝つく風蜀魂　樗良

青雲のよこすのふたつ郭公　也有

郭公巻の初音ぞ眠まる　仝

子規此九日も月夜かな　蓼太

むれやぞ夕の名残れ時鳥　仝

郭公あかれむまで老に成り　闌更

奥山や花ちるかたに杜宇　仝

弓よりハ弓ねておく杜鵑　白雄

起臥のこの夜泊る郭公　仝

不如帰昼ハ晴も落すべし　暁台

周慮悩しよ私の残し夏に　仝

節ゐて乱れるゝ夏の声　仝

橋まで夜の浜茶屋てあり子規　蕪村

付かゝる声明のうしろかな　几董

子規路通ハ丸の色含み　仝

郭公離居しの形見かな　仝

子規起してすゑん人今朝し　堞芳

枝ならくれ擢にきこえれ時鳥　（大坂）嵐流

杜宇まつハ甲斐なれ風の雲　素蘿

鶉井らつを追より郭公　猿岩

似ゝすのもうき暁や片ゝきん　（尼）諸九

鳴亀包にそらも白声に　不明

田植ても座のうちへ子規　仝

飛出て声をきゝれきり郭公　岱吉

郭公空のうへすべりや声る　仝

子規うれにも更くる江月ふ　鉄船

ちる花の先に忘れて子規　斗入

山越へそも雨に低し郭公　仝

大いさハおりの声え郭公　続石

郭公鳴木とあらハそれ楼凡　仝

半月息凡あるよおかれ子規　素功

杜宇きハ声も乳先に今　梅人

旅人を没ハ追ハ片しむかれ　存亜

白風の為安さき郭公　仝

子規くり枕の草も白ふ　大江丸

よそりても思ふにつれぬ郭公　仝
あまうへに鳴なありけり子規　英二
まありゝ鳴ていかにもあれぬ子規　恒丸
宮衆の森さかうねぞ子規　仝
半うる花橘の精平郎公　祇兮
世の中にたゝねさく子規　松兄
山さるの森ゆゑ方中を子規　希言
子規うく中ふりまるの空　仝
夏山や為にきゝおる郭公　白樂
夜ハ月のいくつもあるそ子規　雁城
子規松の花扶ても月夜かな　士朗

寒しきむさる声の子規　仝
村雨ハむかし流す郭公　仝
杜宇鳴や篠つく雨の空　遅月
月ハついてよくかゝ郭公　湛六
子規鳴や藻花雲白し　古翠
時ゝ鳴声やむらくものあや　仝
何やかてうんと讀ふ時ゝ　樗堂
月花のあとのなうり子規　仝
光ものハ初音も遅し子規　仝
周邉ありしられる奥の空　升六
同鏡に森や二月の子規　丈左

子規鳴やうき世の山の中　古琴

子規あはれりうきさ山の家　木偶

見さらハしてえぬむ時鳥　道隣

子の節を人も夏らん子規　成英

ちらくと見へしそ松上時鳥　仝

夜半雲のさ木よりて子規　仝

短夜ハとても短し郭公　嘉年

子規声ハ下限ハなかりけり　完来

まろうしに鳴は八声し子規　仝

松杉も晴しさうも郭公　江戸　柳也

痩骨み閑喰にけ来て子規　浅子

子規なくねんとさみれりせ　菁之

君か代のやさしされや子規　仝

時鳥わりん挽なる字夏せん　仝

子規天の川風おとれあり　可都里

鳴るこりりれあしこゝろ　仝

美人とふとり寛しと郭公　仝

きるあり紀室井の時鳥　菁成

鳴る戻れくえはゆる迄松か時鳥　祥来

音ハ人によるし戻りしまれ　車大

地ふりりて鳴て夏らえ時鳥　鬼子

若葉ありく萬れハ月に出る鳥　信濃　宗志

花の香ハ眠に限あり時鳥　（尾張女）白柳

きえや中洲のくとうて子規　乙尭

子規啼て江上数峯青し　仝

小笹生しめつらし頃ハ子規　乙二

ふる畠に住つけゝり郭公　一学

いまさらに回り道遠し子規　月居

鳴近に初音なつかし郭公　仝

三声鳴声を惜とや郭公　冥々

羽ならしに鳴けり子規やみの空　大阜

郭公一枕の夢ハ投やすし　岳輅

子規人一時ハ物うかし

よそ人の心ハやさし子規　仝

初音ハ月の花之時鳥　仝

夜の外言なかなかのまり子規　月化

人定に年ふるし郭公　平角

大空に身をつなつけて子規　尾全

子規草の戸あけての月夜之　蓁帆

めくなりハ郭の松の詠め子規　仝

十声ほと松に鳴して子規　素迪

今宵に夢のうつゝや子規　袁丁

ふる島ハのつりあまし郭公　一茶

時鳥縁のあかりの夜の京　寄閑

りかゝり雲ゐまて子規　仝

子規呉越のなかよけれとり　堤翁

り葉ハしかて縫ふそ子規　長高

子規四月みれ山の高きより　素卿

子規市にすむ身と伴ひ鵆　仝

子規それそと見れハ山の滝　玉暦

白すしてらハされ鳴れ子規　雅閣

色り九寸のうちへ子規　椿雲

兎まれれ有りけハ砲て不如帰　仝

郭公ありてそ手の気やする　歓丸

鵑くおそりて物意の子規　蕉白

挑て鳴る泣まて貴き子規　雲樵

鳴そめてたくやかちらそ子規　仝

鳴ちの音ちりひさめの郭公　鶯笠

海へゆく瀬ゞ行より郭公　仝

よるくの灯て長るれ子規　美亭

雅より栖より夢て郭公　乞

浣まてしま人まれ之子規　寛松

木の下とるまて啼不如帰　亜渓

降ら人のためし郭公　乞

垂まれと蓄を行ける時鳥　読阿

時鳥見たり雲たり月の中　少汝

啼時を杉の森見えゝ子規　仝

啼まへとおもふ夜ハなし時鳥　武陵

子規更て算ふる一声か　加賀 松花

夕るみ雲とものいて子規　伊勢 季育

草も木も眠にるしむ時子規　羌升

子規ろゝと杉りへハ夜の空　仝

出てなけハ人をまし戻れ子規　加賀 馬仏

都ぞ人ハ雲ふむ声となり　三洋人

子規世ハへるゝとえねなかりしき　護物

子規人ハ寐てみる声の門　女 志宇

遠山やおりに才を杉ゝ子規　梅闌

啼よ誰ハ見やらず之時鳥　仝

子規扨も似たる声之なり　井眉

時鳥おすりの下中なる声の山　其雲

横むらあすぞ初声の子規　万和

萬声もぞたけしたり子規　女 きく

まして晴し山子規山彩　仝

朔日の空ハちれさし子規　方明

まさなうをさあすりの答千子規　立志

子規月夜よしよれ人の上　漫々

岸にあすのせつらん都云　京 居然

子規まして揺るき高音かな　扶峯

子規嵐の中に谷二ツ　佐渡　麦二
岩の戸をさして出れハ子規　ゝ　壷佾
花のちるに似よりたる声か子規　京　其成
あすも望ミに声をきゝて子規　鶴鳴
花のなさけ声の実ハ今子規　湖中
聞しより耳のはなれても子規　大和　綏堂
この句こそ世に残さし時鳥　拑翠
子規声のこぼれて江月夜　宅阿
子規雲に七千丈ふり　菊世
時鳥流れあちら人来し　白考
子規星を躍の声のしたり　浪花　鷲雪

子規峰より山に声を残しつゝ　筑後　双鳥
子規鐘くわふ小一声　素琉
あすもあたる月日ハあれと子規　米鶴
子規罷経とらしに出る声ぞ　百非
涼しさやあつしよひぬ子規　似風
子規なのこゝハ雲のわたり処　梅閑
子規鳴や江上樹を篤　孤山
子規花声ひ射しこぼれぬ花　摂津　其圭
あつさしハよそに声ありねと子規　丹波　太芳
時鳥絹着に懸るね月夜　重紗
子規二声ばかりに山のあか　出雲　嶠九

子規雲隠れまし月の夜に　似藻

子規雲の上まて雲の上　兔化 得山

時鳥傘ほとのくもりけり　浪花女 桃葉

子規鳴や木末にすりつけて　江戸 陶里

時鳥夢て消しふる夜哉　尼 素刀

子規鳴にはつけても月のよう　常陸 賤石

転音れ屋根の上も子規　摂津 士川

鶏を鳴くも夏ぬ時鳥　方舟

鳴なれし坂の葉まも子規　尾張 支風

子規そちらくて序るられ　右節

鶯音入

鶯の音を入てから涼菜　蘭 青二

老鶯

音をいれし鶯藪の軒端哉　下野 柳起

鶯の音を入るほと面白かりて　摂津 少高

人の老鶯手のとゞかぬそなた　不收

鶯も小野の小町も老を鳴　乙周

鶯ハ手本鶯隣も老しき　士朗

鶯ハ合歓のかげ見て老るかな　下総 雪洞

あちらむかれハ鶯老といふ　之顧

鶯の打れし声して老ゆり　丘高

鶯も老をうつるかげさへ家　一茶

鶯も老る迄寝れ桁かな　嵐外

深山横老鶯にふられけり　筑後 双鳥

鳲鳩

藁くふてそれに鶯老こもり　魚文
鶯も老を聞て下山の奥　惟平
鶯ハ老ぬつもりか呼子の聲　義兵
呼子鳥身ハ杣山の居にありて　可醉
ゆる咲ぬつゝしもえて鳲鳩　蝶夢
それに葉てとやりさう之布穀　蕪左
艸声し木声しほり呼子鳥　仝
呼子鳥賊みえた鳥栬の奥　寀更
井ゟくれ耳ハ聞そてかんこ鳥　仝
夜おそく庄作人あらしかんこ鳥　江戸 卷阿
かんこ鳥まかりるへ鳴うつゝ　暁甚

かんこ鳥鳴や花なき里も旅　仝
鳴ハなく二ッの山のかんこ鳥　白雄
山桜を花に鳴りもかんこ鳥　仝
歎もなき子もまずまじやかんこ鳥　蕪村
呼子鳥櫻の枝も踏て飛　仝
留守として物見に出でんかんこ鳥　呂 松不覚
かんこ鳥夜すがらハさぞく　百明
かんこ鳥なきは散と答けり　壺 百井
花鳥の花の後もりかんこ鳥　岱青
立てりそしさもえかんこ鳥　仝
かんこ鳥鳴や江戸みそてて字　保吉

我淋し鳴く声似ハ後てくれてこそ　仝
くれてこそ姿見ゆれハ我淋し　不明
くもる色あけまくらぬ中くれてこそ　試呂
くれてこそ梅の林をおもふらく　恒九
冬の日も山ハ浅黄にくれてこそ　斗入
くれてこそ古松毬を落しけり　柳荘
尾もありてうなくとしれくれてこそ　存亜
まさきさへおもしろくえくれてこそ　諶六
牛るみれ峰中合をさくれてこそ　淅江
くれてこそ淋しき寝らく久れ　士訥
くれてこそ素笑ましうれぶの井　仝

あまりハ花妻ありたる中くれてこそ　運月
樹を立てゝその陰ハ見えくれてこそ　樗堂
月花にさはるかりの名くれてこそ　ノ旦
くれてこそなくや朔日十五日　業兆
くれてこそ楓の花ハ人しらす　成只
くれてこそなくや小豆の直るまて　仝
くれてこそ琵琶ろ乃のちておらぬ　之顧
くれてこそ夕蔓の網を返しけり　年心
くれてこそ花見し人の鳴る子かれ　竹松里
くれてこそいよゝあれなき耳につく　仝
くれてこそ静かなる世の高音かな　菁成

ほとゝぎす行さむ先へ出にけり　葛三
ほとゝぎすくもゝはなれて鳴なり　祥禾
夕暮ハ夜をそふるほとゝぎす　不寒
ほとゝぎすなくや路は遠ざかる　花堯
はさくと花なられつほとゝぎす　仝
夕暮ハ蝶もくりめほとゝぎす　月居
ほとゝぎす声なるをは色もなし　素卿
鳴をりにさはるものなしほとゝぎす　岳輅
吹れ来て一りなくやほとゝぎす　竜揮
ほとゝぎすうれし浮世を捨る我　鶯笠
明る雨にかゝりゆくほとゝぎす　樵雲

鳴止て志ぐれのつゞくほとゝぎす　袁丁
一瀧を旅人見てほとゝぎす　菱亭
むかしよりちらひさいとゆらほとゝぎす　寛松
深山路や旅人もなるほとゝぎす　長爲
首筋の毛もそゝへてほとゝぎす　亜濱
ほとゝぎす鳴そこなひを笑ふべき　孝周
吉りの卯月ハりもほとゝぎす　一菓
ほとゝぎす居ても帰つる家来て　廿海
ほとゝぎす鼻の先なる木の枝に　女 志宇
人しらね花も咲なりほとゝぎす　卓池
ほとゝぎす声れんハ人まる乳　護物

立綿の蕣には来なりんてゝ　柳雨

白毛の湧るをまつゝ乾くてゝ　女　式々

ゑてゝ気なるゝに夏なるゝに　翠英

すゐつの盃流るしりんてゝ　柑翠

山人は施とゝ云くりんてとり　尾張　子阿

ゑてゝ時々は猶まゝなりゝり　大和　可翠

人よりは山々千ゝは能くんてゝ　幽晴

洞山に表二夜おそくんてゝ　飛驒　淑柱

ゑてゝうよんれの心つに来て　同晴　村之

ゑてゝ何の命もなかるれに　阿量

庭これは似る等しゑんてゝ　秋兒

峰下までを秋へくるゝなれんてゝ　何丸

痩たくて踊りゝくゝんてゝ　壺半

ゑてゝよくもてすむ小家は　江戸　一英

大名も胴ふてするゝんてゝ　升古

世を捨る山あれそりんてゝ　京　橋英

ゑてゝある名おかれも人はする　尾張　沙路

家とし中不十きりのゑんてゝ　江戸　流せ

旅僧をそ見てもなくえんてゝ　可盈

三日も後ゐ焼中ゑてゝ　浪花　存巣

人の来て眺望せんゑんてゝ　存底

ゑてゝはいつれ時るゝはゝみ夢に　、　木老

鶴

画房の手本さへあられてる　之玄
見てゐる外の古葉に芽を立る　山城 白蝉
世の中の気には疎しれてる　常陸 一風
見てゐるなかれは訓てまるましき　左節
つるるやれ初音まちまちきもうれてる　仝
方円を羽に清水にのれて気之　白旋
夢の百数の兵見る夕風　齊人
黄昏や何に動くの数の嘴　竹枝

剖葦鳥（きやうくし）

堀しより外に柳に行〻子　白旋
陽気は夜てそよみれ行〻子　蘿古
行〻子身をなげきに辞之　又明
百舌と誰がいはねど行〻子　瑞石
芦しげて洲にすみけり行〻子　江戸 抜人
芦の末花今より洲に行〻子　一草
かくれ家に境立へやり行〻子　几亮
荷簀のしまりしれやよそかし　仝
夜深ふあさもなく行〻子　宜麦
枝にする外の夕をり行〻子　女 志宇
うかうかとゐて夜ふかく行〻子　胡準
あれ舟に棹さしわたり行〻子　拇翠
行〻子宇治の川中よするしれ　可支
ちる花のあらはなゐけり行〻子　素唄

葭割

よしきりや芦州笛も吹ならん　（下総）保吉
よしきりや千条岸て実も鳴けり　良紀
よしきりは癖を見に来る画哉　昭九
よしきりや浮をんに鳴たれ　芳之
善ましよしきり鳴てよしの風　（三河）祖風

鷹入樹

鷹にまふし白に尤れる樹庭　白境
樹鷹やされも雨ふる風まかう　宗淡
卯の花のちるも乾れる樹鋲　續物

蒼鷺

夕風や水も青鷺の脛きらう　荃村
青鷺の歩む水しらね成りけり　梅雲
青鷺の人まかせにおちにけり　寛兆

青鷺のきらくまりせつく水　（阿波）長雲
紙鳶やも青鷺の影をく足　五光

枝蛙

風涼の樹を前にして枝蛙　保吉
青蛙かくや花ちれ雨の音　（紀州）魯介

蟇

ひつまきふくたりありける蟇　都雀
そこ退て竹株させし蟇　梅雲

蚕（カヒコ）蛹（マユ）

嬉しき世の人を見しる水　于當
森そ気れて可愛く秋も嬉の声　重鴻
灯もさけ有ちらむしまりり嬉　（広島）松子

蚯蚓出

むしられ千々ゆるされ繭ゑ入　（三河）浮流
みすまうる千遍りの縁し朱星井　（丹後）南畝

孑孑

浮みつや出りしは流れの淀　蝶夢
孑孑の月にゆらるゝ小河かな　希言
孑孑や肢にかへるその浮沈　三津人
孑孑のせゝなぎはおもりなり　一方
孑孑は浮て居る間静かなり　魯自
孑孑やとくしらすの新　麻睡

水馬（スマシ）

夕立のあとを掻や水すまし　青蘿
水先に来てやなるゝ水すまし　樗閑

蛞蝓

より合へは蓑をきて御蛞蝓　百明
夕はへの蛞蝓出しまゝ枕かな　百池
引裂て捨る名残の蛞蝓かな　尺艾

致秃

窓に傍へ出れは主をたのむ蛞蝓　存義

蝸牛

静くや宿の風情なり　（丹後）蓋耳
花の露触き角としほり蝸牛　暁台
あありと志る角よし蝸牛　蓼太
蝸牛やその角文字のすりし壺　蕪村
ころり来て居るうちや蝸牛　仝
蝸牛宿かり心に浮もする　白雄
宿かるゝ荒の庭のかたつぶり　百川
雨こりて余り木末の蝸牛　大江丸
水に向て何用あるやかたつぶり　又玄
竹椽にはひすゝし蝸牛　秋瓜

蝸牛世にある甲斐にうごく也　有篁

伊勢が家ゞのかきねより蝸牛　尾 士朗

ゆけハそれ出れハそれかたつぶり　素輪

花さへ從ふるへハかたつぶり　樗堂

葉ぬいて植てやらうぞ蝸牛　素然

へまそ廻もあらんかたつぶり　年人

家持ぬ枝にハ這ぬ蝸牛　青牛

かたつぶりやるすハ角を忘れけれ　一草

田螺より一際まさるかたつぶり　乙彦

朝露や千白紫陽のかたつぶり　寄閑

かたつぶり葉のまゝを忘れけれ　素郷

朝やけがよろこばしいかかたつぶり　一茶

松風や一日動くかたつぶり　菱亭

見まして角を出しけり蝸牛　京 土髪

いかめしや角ありとても蝸牛　塊翁

まてしばし母に見ゆるかたつぶり　蕉雨

高かまり落て忘れぬ蝸牛　尾全

たのしき花月に角や蝸牛　椿雲

雨にあれハ空のまなこや蝸牛　浮人

りくて波へも知らるかたつぶり　仝

蝸牛危い事がたのしい朝　江戸 紀逸

蝸牛それもほろしの家ならん　女 志宇

てゝ虫えりんでまれて嬉しいか　快芸
小白してふさつれなりな蝸牛　文角
蝸牛それなの家も幸けゝ　有斐
干葉かもまく芸有り蝸牛　本は　南濵
角ふるハ虎にむきふゝるつもり　左文
家たけの家のやすけやさふつもり　濃☐　喜思
とぶ夢にふくて見れハ去るつもり　尾張　是堯
白たれに角ふられさるつもり　常陸　又寧
朱折し夕アも侍へさうつもり　伊勢　風也
去るつもりかふさはれハうらく之　李来、
蓬生の日か潜しいかるつもり　吾方　卜鷲

葉よるのやさもつれくの蝸牛　下総　古尭
枯れしくり遠くなり蝸牛　丹後　支白
家世をも斯か遠りたしさるつもり　李尺
壱弐の市まも出るりさるつもり　本は　以柱
後たくハはしつて見きそるつもり　下総　可川
さるつもりなりと兄きた俺元ふ　尾張　可竹
乞らけ見かへるりれさるつもり　る逸

蚰蜒

何ふてふとるまのやうななく足　吉養　南皮
糸ふ寸長の有りとしられやすき足　文角
なすれたハ蛟天もすへし蚰蜒　京　粟翁
投の手に亀消つ長のうあき足　陸奥　旭女

蛇衣脱

ちからしも限りのほそさや竿の先　（伊豫女）花眠

いそくへきんもあるかなからし　（下総）求一

蛇の衣脱かけし痩か肌　曉甚

俳諧發句題叢夏中

桂五吉節輯

五月

孫も庇の逢にまる五月かな　白雄

一月は日に名をとる五月かな　松兄

夕日の杉さへつけさる五月かな　士朗

桐の花八花の盛の五月かな　升六

猫に屋根越られし五月かな　蒼二

深山木の底に水すむ皐月かな　嘯笠

り先に出也植てある五月かな　三浮人

茶の灰へと鳴かる五月の霧雨　菊也

杉さくの作五月は八重椿　（但馬）英貫

菖蒲

ふみれ名を変へくらしき入日かな　（下総）梅史
これのあやめを売る句れかな　蕉左
竹椽やさく〳〵切れあやめ草　長翠
網雇にあやめ見せうる家ろう　業兵
親の手に小流のかゝるあやめかな　吉岱
戸明れハ左右の軒されあやめかな　乙二
蹊一手入るとかほるあやめかな　一茅
山越に江を押わくるあやめかな　青岡
花ハうく〳〵も荒れがハ葉ぶあやめ草　素檗
晴てこれハ定色うつる綾女かな　魯隠
あやめ草を入りかふ比ハなかりけり　申為

菖蒲売

旅人の笠にやさすやあやめ草　雲燈
おりそめて切尽しけりあやめ草　亜濱
売れハ深く〳〵のあやめかな　井眉
縫おきそ撰て捨けりあやめ草　（女）志宇
白雲のかく伝ふてあやめかな　（尼）外流
襟うつも晴しあやめ売れにて雫　（信濃 女）栗り
世の中をそよくあやめ売旭かな　（下総）茗観
引かてりしておの見やさあやめ売　鳥醉
長くと脇にかけたり菖蒲売　白雄
川岸れ初売これも菖蒲売　月居
花売のより届けるあやめかな　蕉雨

新菖蒲

呉竹の代々とゝやさき菖蒲売　桂雲

女きてありふれたのもあやめ売　流陶

菖蒲かてあやめさし込新端午　果史

新あやめ市に半るむかしかな　白旋

新の字をふハあやめ名のゆかりかな　保吉

新あやめこれや一日は忘草　仝

仮初に新やあやめ花の露　諸六

枝の後あやめに匂ふ新端午　一醒

あやめ葺て朝起なるや家の気もし　成英

世の塵の見えざらん新あやめ　完来

笠にふる庄からくるさき新あやめ　一草

又六が枝に見おろすや葺あやめ　常笠

よまれしき気もわかぬや菖蒲かな　（女）志宇

半の中の仮様忘るゝ新あやめ　充阿

あやめふけさしと見えける庵かに　（上総）金塊

さ浪のきさき新もふるあやめ　（阿波）梅子

ふきあやめ雫も宿のにかほり　（尾張）三霞

菖蒲酒

世をさける時はあやめやさうふ酒　白旋

菖蒲湯

さうふ湯や菖蒲浮こる乳のあまり　仝

湯あかりやあやめはさゝる指の股　保吉

けふ湯に金太坂のにみせたれ　（羽州）右範

兵風呂に六のも枝ふあやめかな　旋閣

菖蒲刀

君ゝ代のためしに抜やあやめ刀か　（秋之）見推

作り出す古刀さハあやめるり教か　年人

菖蒲打

菖蒲打昔の心ハゆかしかりし　又昭

君ゝ代や下地されてあやめ打　保吉

薬玉

薬玉やむすひてしまるみどれ笠　暁甚

薬玉の下野や真に夏まかし　希言

薬玉に毒除の葉をかけてをり　（下生）業桂

印地打

張する八親の心そ印地打　貞佐

百錬鏡

嫁ふけて流されけり又ゝ鏡　蕘古

すゞしさや男の腰く笹粽　仝

粽

若みれ戸や粽を結ぶ束の露　白樟

ほどかれぬ粽もあられ菓満か　保吉

五月五日に挂て見んたまもの粽か　岱喜

美くれの跡もなれ笹粽　隆石

世渡やゆかしきなれ笹粽　士諺

粽しもれいくも結ぶく粽か　仝

笹粽一つ投の心地するか　書岱

白滴に蚕あをきたり笹粽　成貝

投出して見たまふ家之笹粽　乙二

まきあるまゝの下粽の能伎　蒼虬

壹粒乳母のなしめ尋ぬや　菊也

産々して来れハさうし瓢粽　學笠

柏餅

戯

粽結ふ跡もなかりし十団子　旦之

跡先をすてて去れ粽に　林雨

又粽外の拵れに似たるかな　女 濱藻

君女のむすびつくりや柏餅　嘉山

幟見や降さ拂床の立つまり　柳九

源氏画や武者の幟は家の兄　保吉

をさしおりあげたる幟竿　又明

矢ざりしと身に見ててり幟に　猪六

立るゝ所子規なしの宿りに　外六

君々代の治味方や幟に　木僊

板りの鬼も久しきの宿りかな　江戸 麗龍

削掛幟

菜子摘

菜日

又りるも晴て幟の気に　魯隠

桐那の派するるの宿りに　伊豫 其梅

白きは晴し北風の幟ら帆　近江 松悲

条流の子れの宿り依し松の中　大和 兎有

掃帰き来て気すかる紙幟　有斐

降る日の中に立つり初幟　紀州 十二歳 閑弥

名兵幟紙物立ててすむ世に　伊勢 披古

岩世とさ古ずも立る幟ら帆　壺君

をもしろく見てもきな幟れ　木 子鳳

百子や兄土ねゝ名も忘れ字　不知作者

芦火黄て菜隠きを待れかり　素道

加茂競馬

鼻息の上手又出てゆく一馬　几董

競馬あとおそ人良も有り　蕪古

翠簾越の詩に落るんなる人馬　仝

むつかしきつるをはけところく人馬　白雄

鞍つけは先もちられよさく人馬　仝

肥たるをすてにきつしまさく人馬　文談

負ても左や八ッかりさるさく人馬　蝶吉

こゑりの良に出ちる競馬かな　士朗

ならべる不りとはって又かたる　升六

見るんへ十分にかける競馬かな　寄闌

花あやめよちろべるもちまろし　（浪華）蘿峰

竹酔日

竹植る日も人の来て拉けり　士朗

竹植てすゞしうえにけり音の下　仝

竹ハまた植し日なれは月夜かな　擇雲

竹うゑて揮ひけやと松にけり　策兆

竹うゑて寂寞てうつりも風　岳輅

森静て見るさ竹の植所　月扴

竹植て暇て見たる小窓かな　（尾張）墨集

竹うゑて先にすゝめかしや姫　（遠州）雙阜

植ゑるもまやつぶれし竹の影　東陽

花菖蒲

花あやめ又天の雲をあゝるは　暁甚

照り星に三尺低し花あやめ　（尾張）月菓

石菖蒲

むすふ手に石菖匂ふ清水かな　蝶夢

石菖や濤の光も藻汲時　吾岱

石菖をよそに移して庭の滝　序人

石菖や何の葉もれもいさぎよき　（土佐）年々

花且見

名いゐ乎かつミ張り貝具足　暁臺

世ハ春や尓かつてかつミふくて　白雄

沼入て奴里のふさなとかつミ　護物

瘦すの根こまで喰れなかし　李墓

真菰刈

鶩ても常の菰や真菰刈　也有

真菰刈　舟は洪水の水寄し　（但馬）野半

蓮巻葉

まさ／＼しきや蓮の巻葉かな　（江戸）丁磨

蓮浮葉

浮蓮に魚寄てきてちりちる　乃光

池の蓮見え浮葉の風情かな　定之

花ハこれ蓄て月花蓮の風　周叉

蓮

蓮咲てけしきもハなりけり　（紀州）可醉

月入や浮葉うごきし蓮見舟　几董

白蓮に人かけさゆる夜明かな　蒐左

吹売の浮葉に蠅る蓮かな　蕪村

日光中や蓮の葉からの風する　花縣

美麗ふる嬰てハおのれ蓮の露　蝶夢

咲うちてふこれいるや蓮の花　百明

白蓮に夕暮霞る花かしな　白雄

人去し蓮の入江や山ふところ　宗讃
小蓮の香やしきまくらしつ心　烏明
白蓮に傘干む女かな　保吉
村雨ハ月に上けり蓮の花　斗入
あらけなき蓑笠白の蓮かな　士朗
尼成る女の夢さそふ蓮の花　仝
山本や小さき蓮ある軒の貞　旭丸
うつろいは色をもらはす蓮かな　仝
村中の本の摘残り蓮の花　樗雲
月とれ中辯まりさし蓮　（月坊）金沙
莟のうちに女性まちなかり　成美

蓮の実や蓄まるゝ朝きり　完来
白の蓮くとゝ一味に雨まり　沙羅
蕪荒にふる声と花なり蓮の白　年心
まゝとそやりし夜に起て蓮を切　葛三
大ゝの蓮は咲まゝ咲きり　一草
新紅やうつ一の尺に蓮の花　乙彦
紅頃寄りすして蓮白し　仝
けりゝに蓮のうゑ山燈に　鶯光
紅白の中に流り蓮の葉　（流仙）与州
風をとまつゝしまもみ蓮の花　亜渓
丘の家や蓮に吹れて夕茶漬　一茶

藕花

白蓮のそのにほやさぬすみけり　揖翠

白蓮や根ハどろのそれつまはかれ　（浪花尼）沙生

咲きてはちすかはなれ蓮の花　寿翁

白雲は洞こころざし蓮の花　釣翁

蓮ともなく咲て前より所ハなし　白光

白蓮の一ト輪咲ぬ稲の中　（尾張）東暁

藕こゝへと枕をかれる蓮の花　藤之

蓮の実やをうつして見る花香る　（豊女）愛康

藕の花や汗ぬぐはれたり夕かな　蕪村

水辺の所藕花さく雲の白　仝

その花やあからみてたは風さそふ　白椎

その花に吸はれ落ちぬ貌子かな　寀文

その花や引きかけり渦跣　暁芸

引汐や深き藕の花のさゝ流　藻美

山かげに押かりけり深き藕子　鉄吉

その花に夕風ととも起りけり　美波

その花に挽て拾ふ命かな　産月

もの花や見はりかへる月の影　（江戸）白芥

乳れ花やまはりかれと清きかな　瓦亮

よしやこれもにほむかりや長流光　仝

村雨や深き藕かゝく花ひらく　一華

その花ハ咲ハ咲ながら根の子　篤光

萍

ゆゝ流れて硯に浮萍の花盛し　男　鶴基
その花や水のこゝろを咲乱す　瑞馬
その花や風ハつゝとも見えてなし　綾帆
萍や蝶の力の押しへても　女　千代
萍にかゝれ子拾ふ汀かな　百洞
萍ハ蟹名しや子眺河　蘭老
萍や移り嵐のうき根浮　白梢
萍に竜ふさし迷ふか　保吉
川ありて萍浮ふ月夜かな　董亭
萍を引つけて飛ふ小流毛か　斗入
萍に月ゆらゆらの夏川かな　湛六

捨られぬ世や萍の花なとし　遅月
萍やよりてうかふ夏の雲　長翠
萍や水のよりかてなく雀　寄閑
萍の花とゝつく蓮ゝ葉丸　一葉
萍の影や並き茎の縁　陸奥　亜笛
萍の花や氷ならてゆらしき　同人
萍の花にうかんて山のうき　女　志宇
萍の花もたつハ月のかな　梅閑
萍ハ見入る根もありしかな　斗白
萍の根ハ小町も恋ありし　八丈島　孤雲
旅人に似て萍の咲にけり　尾張　旭山

雲草
苔花

岸やこれ子供の足のあと　ゝ粟大
岸え花ふも見ゆるあらし小　浪花女 てる
岸やれより水の案流くし　遠江 起石
岸をくハへてやゝし萬几　禾流
村雨や足ハぬるまて浸ゐる芋　千梨
墨捨し猿の捨也や苔の花　蕉岩
苔生ねもゝ花咲ぬ家持ぬ　士竹
灯ともすや杉尾し人を苔の家　仝
笠を寄て十日色り苔の花　洪六
ひやくと風もふくゝ苔の花　素基
あみそあるらしなり苔の花　乙二

苔の花人かわりしう枯もふり　亜濱
旅人の跡ぶに来るや苔の花　羨亭
名の末てはるゝまり苔の花　桂堂
石寄の詠や先えこけれ花　素閣
流木の堤鳴あり苔の花　蕉雨
庵の苔花さくすべも志るねえ　一菜
沈くと月もされえ苔の花　民陵
紫しきの奥に咲けり苔の色　之得人
松風の跡あに咲跡苔の花　女 志宇
なのしこハもよめわるよし苔の色　梅町
花さくね苔をハまんゐるの米　尾張 岱雲

百合

鶯のうけもすゝしと言の花　推己

水音を追ふ風清あり百合の花　女 千代

山ゆりや若しお鶯の立流　蕉左

山ゆりや薄暮の方よりつゝ咲　向梅

ゆりの花をとは山路に吹れ　士朗

ゆり咲て池中の清み浮かり　巣兆

梳髪やのゆりかゝつく笑顔かな　成美

さゝゆりの霊のそよぐ伏家かな　反亮

百合咲し所を花咲す人に　仝

夜道して山のゆりしおさせ　寄閑

谷に入りて賤いかゆりの花　素迪

赤ゆりや口明て見る里の犬　寥松

石竹花

是ほとの指もさゝれね石の花　女 千代

男にはつまゝせともなし石の花　武蔵 石敷

あかりてつくりしも石の花　尾張 其答

石つむや雲に旭の昇りうち　文左

石花つむうしろ姿をてらし日か　尺艾

忘草

忘草の花ハことしも咲かゝり　素更

冬風に夏忘草うゐなかり　梳左

見捨けてあるさかく忘草　可都里

萱草

萱草の株の荒草咲ぬ行山家　魚文

卜毛花

志もつけやりに蕋れさる花の色　近江 青岸

金銀花

あさ庭なれ家々にハ中し金銀花　古節

夏菊

夏菊の沖梛見ゆる庵哉　百明

夏菊の露や浮世を深く咲　花縣

よそからもそれとみられや夏の菊　順几

夏の菊こぼれ家のかげに咲たり　巣兆

夏菊や秋をまたハ菊の顔にして　平角

夏菊にハ臭き岸雲たちおほけり　常笠

夏菊の見ふるさわ宿く咲たり　瑞ゞ

紫陽花

紫陽花やところに咲て水吹し　柳居

紫陽花やよれハ坂の咲花の末　曉甚

紫陽花や染て日数つもりけり　百明

紫陽花や楓に残りし色ぞ深　葉叟

紫陽花やそれにうつむく日あり　化烟

紫陽花のまとり影ある苔の月　今

紫陽花や折れて後の宮のもと　保吉

紫陽花やさらさら家の色さより　文嶺

紫陽花や根元ハ桜ハ風情あき　順九

紫陽花や色見えてより七小町　雲萬

あぢさゐの花や咲く寺の桃　成英

紫陽花ハ花あつくの化粧かな　女 白柳

紫陽花や夏ハ今うつくしの盛　呂差

紫陽花をさかしてれくや三見盛　素隣

瞿麦

とこなつや日数さりしき夏栽場　護物
とこなつの折る千日をまつや仏　北溟
とこなつの花にたちまち千偏白　鶉秀
とこなつのちらぬや打毛こぼし　松江
とこなつにうつり安さよ夜の色　里麿
撫子のゐまつん宿涼し　陸奥 存亜
撫子の夏までうれし棹の宿　恒丸
撫子はさくや帯を前して　華裕
撫子はふしくまにえ日和　成美
撫子はこぼれて折るさかり之　仝
折々の年古めかしき此撫子　菊之

かくしこや千日のやとりの行か来る　祥禾
撫子にたゞしきさら乳ゐるかり　可都里
撫子にちとこぼるし松の風　一茶
道中や撫子を道芝にしてそし　道彦
花美もなからん世のこの花水撫子　仝
撫子の花にまうたりとゝの白　菱亭
舟戦の撫子たのむ壇か浦　桂雲
撫子に撒りし宿や二度香　鶯笠
撫子や汐風ぐるゝ夏ゐしも　三径人
撫子は垣ゑにかけそ麦の穂寄　女 志宇
撫子ハおりり花をしてひとかたけ　梅間

撫子の一本橋にしほれけり　近江 渭水

なでしこや何の心で雀の子　尼 素月

撫子を活まれたりとさゝく之　輔之

撫子に鼻つきつけて昼寝かな　伊勢 尺翠

撫子にやすらひし山路かな　尾張 星山

扇にて撫子を植る地庵かな　、 路大

常夏

常夏や晴天すてにとまり川　菁哉

常夏を遠く家有る垣ね哉　東陽

石竹

石竹や花もうこん色の露　淑英

蛸釣草

地方にも蛸釣草の志なりかな　亀光山

馬歯莧

鹿寄りその草をふまれけり覚　江戸 笠扇

酢漿草　名は花白ふとしれく雀　乙二

かたくみ花の方まも朱にあり　仝

存花葉　花あれハ蓼の茎さへ見られける　道亮

蔦花葉　つる花葉系松戸の花盛　李郷

藜　秋まつのはなを遠ざけ藜の茎　吉丈

松風の藜くり返る山辺かな　尾張 忠交

時計草　滝つぼに鳥にねらふや土圭草　甲斐 花晩

吾草　老木の手のあそびて阿波菜　道亮

十薬花　どくだみや夜のまのよて花白し　鶯笠

一ッ葉　一ッ葉の下まも見えすなりけりかな　道亮

覆盆子　岩川下はいちごとる身の及びこし　柳居

山路の杖にうけたりつるいちご　晩芸

岩もれや旅人労ていちご盗　白桃

茱萸

雨のさん濱ハ茱萸の志るりに　仝

桑実

桑の実に片襷染る娘かれ　尾張　一風

藤実

藤の実や杉間にかゝりし竹の宅　梅閑

青梅

青梅は落る千夜の枝ひさし　凡柱

青梅に眉あつめたる美人かな　竜お

梅熟ハおれに気れたる暑さかな　白椀

青梅や抱も吟きねてこぼれけり　菜兆

青梅をとりそへてやりて小皿かな　素塚

落る青葉に青有り垣の梅　辰能

瘦梅のもりし年さへもかゝりかり　一葉

南天花

南天の花のこぼるゝ暑さかれ　仝　石麻

南天の花に花なし根付彫　可麿

蜘の巣や南天の花のちりかゝる　備後　墨因

栗花

栗の花赤くもりて淋しさよ　森亜

夕風や青葉にかをる栗の花　只艾

栗ありと出し素戸や栗の宿　道堯

家方にちる暑したりこぼれ宿　桂雲

深山南れ宮比をとられて栗の宿　呉老

蛇の花さかれ降ちしたりこぼれ宿　玉光

睦まじくね宅の匂ひやこぼれ花　作州　素芝

椎花

椎の花人もすさめぬ匂ひかな　壺朴
冬の葉に下たる家や椎の花　康人
そのまゝに木かけを見せて椎の花　長老

杜鵑花

窓にみえけしこゝしの花　惟平
不見日もそねれてはなし山つゝし　（加）升菊

合歓花

合歓花木陰人もねにくゝ見え　白旋
手の中のとゞろねありや合歓の花　麦古
合歓咲て人は急く昼寐かな　保吉
さしされに月も出るや合歓の上　順丸
合歓に風吹れ安ふき夕さかさかな　年人
合歓さくや世にあふれさる豆腐菜衣　道尭

合歓ちるや毒ありけなきるの雨　素郷
寐たらぬ合歓の星の影の内　雲桃
合歓の木は花より多き雫かな　護物
酒の気もさめやらん合歓の花　金境
老るれ世を咲よれく合歓の花　其汀
夕風や汐家の合歓のさかりなき　越中 画牛
短夜は木も見えさりねぶ花　駿河 馬光
合歓の気をすまし文字ある潤かな　二菓
塩浜のむしも追なり合歓の花　陸奥 丶 東丸

梛花

長梛の花やあまりを咲こされ　秋兌

花柘榴

白頬る中や咲たつ花ざくろ　都雀

花橘

古宮に道記をつけて花橘　三津人
花柑橘千や四五枚麹かな　李枝
先ゝより花橘に碑かな　白桃
橘や枕子身のかへ覚え　保吉
橘や月夜よされは深世めく　淋江
橘の香ふとさまもなしに　乙二
橘のほうへあるう句かな　素鬭
良をさらしや花橘の夜の坪　嵩笠
橘や子守見たるか女客達　竺烏
橘や白夜の月は盃とる　雄念
なつかしの橘匂ふ縁かな　米堯

樗

花樗曇る日も匂ひけり　樗良
旅鞍の見えなくなりぬ樗　暁台
村雨や見かけてさき花樗　白雄
入日のそとと咲くや日でも花樗　甘谷
昼の井の辺たちけり花樗　月居
山の新芝へ見えたる花樗　孔阜
とう見ても夕暮のそら花あふち　江戸 枚杖
花樗さしの所の久しい来る　星譜

山梔子

山梔子の花よしくと咲にけり　伊勢 濤石
くちなしの花和まの日に匂ひけり　、 又蓮
くちなしの花すゞしくもなりけり　以足

夏木立

くちなしの花や有るも婢女顔　讃物
口なしの咲こほしたり門の内　庠人
口なしやこれそよ相ふ月もなれ　了年
くちなしに一座もや花の露　氷水
雲んで一簞越ぬ夏木立　暁基
雲にたくさのん入り夏木立　寛右
酒十樽ゆりまてゆくや夏木立　芸お
出ゝ来ぬ子供ハあれに夏木立　白桂
夏木立人の上ゝハ坂ひとつ川　百明
弥き白い甘き白いや夏木立　又明
夏木立家ハちひさく来れたり　成英
日盛れあけの雨や夏木立　尺艾
浅晴てなくさものなし夏木立　道尭
汗つるハ流されりし夏木立　岳輅
扇杖も忍して居るゝ夏木立　庠人
いは来ても夜の椅れそ夏木立　壺伯
人の児ゝ蝶ハおし夏木たち　井眉
暑りや馳ゆゝ来ゝ夏こゝち　陸奥 都耕
百姓の家光ハ見えし夏木立　紀逸
ゝ肥ん気や袍も夏こゝち　鳥項
川風や暑ゝりたる夏木立　雉啄
夏木立中さは男ゝりけり　何頼

若竹

若竹や眠蔵をもる月の色　馬酔

若竹や竿のゆく節あらして　化雄

若竹ハ月にやさしきすがたなり　暁台

若竹やうとき茶室の白さうじ　百池

若竹のりれあらしする哉　素丸

若竹に二丈の夕陽枕哉　梅人

若竹の露も明日のやとり哉　士朗

葉に砕て若竹藪の掃除哉　兮

若竹に隠者めく之焼直鷹　成美

若竹の葉にはく月に光哉　蒼虬

若竹のゆらつく月に篭哉　長翁

若竹の打ふられく伸かゝり　魯隠

きいたしてそよげ若竹今のうち　一葉

若竹のゆらつくとして世にふるる哉　中斎

若竹や雲井つ葉ハ今の幸　梅洞

松を越て若竹の新庭なり　湖中

若竹にわれハ汲よく来にけり　周防　一茎

若竹の露をはらふや水貴に　重朝

今年竹

風よれ東を吹ぬれや今年竹　女　子代

それなくてそれなくらへて今年竹　蕙右

ことし竹人のたけハこえにけり　半入

有明ふるゝへかたふくことし竹　湛道

竹皮散

雲とよえすのか陰そこなし竹　雲樵

人の来て笑見てけりやさし竹　柳史

とし竹さらねやてある家の色　[illegible]　眠貞

風もふけ蔭ゆきうあるる竹の皮　越中　荻人

瓜花

仇花とありて落し瓜粗　暁甚

仇花の数多かりしや瓜の花　書蘿

畠まもり夜はありて瓜の家　有篁

蔓先のあれにけるこつ瓜の家　寿剛

荒てゆく家のありけり瓜の家　護物

いつからか葉はかれけり瓜の家　三津人

ありし世に何もし花ある瓜の蔓　梅閑

胡瓜

先に出て笑ふまけたる胡瓜かな　越後　七里

君すなるを知人と胡瓜喜びかし　冨彦

天瓜花

人の身ハたかしらのからん瓜　江戸　素丸

早松茸

早松茸二月に瓜も匂ひかるらん　周防　秋庵

子苗

挽茶や田中の庵の這入口　白樵

苗唄に里やはるる若菜子　保吉

あれ井へ若々小言と子苗唄　存亜

かりつさ云つてさの子苗唄　柳荘

植るうちも八束に採む子苗かな　完来

川の行くかれハ麦刈苗運ひ　道尭

流来る余所の子苗も植にけり　雲樵

田植

田一枚早苗にたりて雨になる　青岡

走運のより揃ふ日なれ苗　寒松

暁道やゆつりあふる苗運ひ　白塘

早苗舟扉ふて庵の洗来に　筑后　渋舟

隣田の月かりていそく早苗かな　帆平

白雲の下手にちる早苗かな　信濃　石阿

早苗より出のはれけり女丈より　幽嘯

見てたれ捨しもあまる早苗かな　江戸　素樸

松にりを諷ひ出しぬ田植かな　蓼太

降りして月より沸し田植笠　公

鯰得て帰る田植の男かな　蕪村

木のもとや松なふれにちかる田植酒　白旄

顔やうれ白手てもやれ田植かな　尼　諸九

志みかしや田植は諷の白の月　保吉

一枚は月夜に於て田植かな　肥丸

植て去る山田を廉の通りかる　士訥

まろひあふるへ植来る水田かな　公

やる里の数を田植の声かな　仝

山陰へ雲のうつる田植かな　芳之

童子の田植笑ふや水の字　樗堂

植志さるしろに着る田つゝみ　蒼成

侍に乗られたる田植かな　蒼之

植つけて月ハよの田となりにけり　大阜

そや〳〵と植て去けり田一枚　道彦

明ぼのや田植の留主の板しまる　仝

いくせうつ声て田植の古戦　篤光

花の里のけふんに田植られけり　春郊

うくもてゝ戦しさうなる山田かな　魯隠

菰菰のやれたるつの田植かな　蕉雨

人もうり植ていんたる山田かな　武陵

田は植て風の戸口と来りけり　鶯笠

下る身のすに見えて田植かな　長高

わり合ハぬこゝちて田植人　（江戸）座来

田植唄

道端へ聞も来て居る田植かな　梅堂

戸にまて植てなつかしき田植かな　卓池

松うけと来てさつて田植かな　鈞翁

帆の見に見えて去て田植笠　〻山人

流に移すて見て圃の田植かな　（能州）其柳

田を植て蕎も寺まんしゝかし　都鶯

田を植て去るや気の去い事　（安藝）木容

よしあり見かり合のつ田植かな　丘意

松風に聞しるに揃ふ田植かな　又雀

山近く人おりさて田植唄　蒐古

関にけつの止もるまて田植唄　武喜

青田

夕暮の気ハまさりけり田植唄 兌直
夕かけて猶植さかる田唄かな 無隠
植かへて只一枚の青田かな 左明
傘さして上れハ出し青田かな 瓦橋
中りくれハ道ある青田かな 百明
風そもし青田にさゝり哉 湖流
鴉も人も残りけさる青田かな （月坊）一草
的とりて停る楽の青田かな 大阜
山家そよくれ青田に紫の色 有兵
大切な飲食の残る青田かな 仝
ゆく人もなるも青田と成にけり 娠谷

松風やかくしたて田ハ青し 枝也
松明の火を拾し過る青田かな 等笠
勢ふ比満田ハとしく青さりけり 一菓
大さけハ植木に過る青田哉 白塘
火を貴て見さる小家の青田かな （追ら）花陶
打まて見れハ千青田の夜の雲 （武蔵）桑嶙
下刈に青田見えて少し小藪かな 梅同
よかるまもまんまとその千田の青き 呉光

田草取

笠の端に渋ちれけり二番草 蝶夢
手のいたぬ丈婦うるり田草取 亀吉

早乙女

早乙女の笠かけ柳連たり 白雄

兎の子をはせよつる植女かな　仝

田植女のころんでたれり笑ひけり　暁甚

り戻り早乙女ふりさ見えにけり　保吉

田植笠嫁に挿子をさせけり　大江丸

早乙女に祝ひとはなるべし　蒼虬

早乙女は夜辺の咄も尽ぬべし　乙兄

水まち子て女をまつ事もかな　月居

早乙女や箸にくまるゝ花　一葉

早乙女の笠やつゝ陣を柳陰　（尾張）松叢

早乙女や笠はむかふに流まで　（陸奥）又切

蝉

初蝉

初蝉や眼鏡魚れは飛てり　又明

蝉

初蝉やりきれぬさの空淋し　ヽ　凡鳥

初蝉や空家ふくれ花ちらる　梅間

初蝉や夕暮の声ハ古か井　寛松

初蝉のしはしとまれ雨日和　（下総）梅暁

初蝉や日ぐらしの花ハちりにけり　ヽ　其晩

初蝉まやをさる松ゑすり音て　ヽ　李華

風ハされ蝉は吸れて一木かな　白碎

蝉の声携あるハ絶ぬべし　暁甚

そよろりしてもやまで蝉の声　几董

まりの果を枝や蝉の声　華亦

空蝉やむかしたまちハ人の果　蝶夢

松の木や五六軒から蟬の声　卜旋
蟬啼て魚追りゆく縄手かな　保吉
啼蟬や浮世はなれし楝の木　斗入
啼やめは啼蟬飛んで見えにけり　存亜
夕やけの空しや此松の蟬の声　緒呂
啼中にまきれて蟬のひとつかな　東武 不角
跡の日をみれは蟬なく木陰かな　士竹
登れ来てうけは寂し蟬の声　仝
蟬の声静にかけはなさつかな　三歡
蟬なくや一ト声ありと思ふ時　女 きさ
人にも蟬此中虎と名乗るなりや　識笑

ともさら蟬を浮世にこしの家　仝
蟬なきつゝ鳴ては日ハ出たなり　祥永
蟬なくや井戸掘ひとり出れけれ　可敬里
蟬鳴しや子も親からしぐれの声　仝
そむいて木陰よ千蟬の飛り　李栗
空蟬のうつり日ハ夕けも縄簾　仝
世を于む木陰の里や夜の蟬　素郷
蟬なき出よりと木の葉くれ　道尭
鶴みて夏ハ涼けそし蟬の声　仝
筆をとりぬ世はつけしれの蟬　月兎
親から此木もたふれぬ蟬の声　寿閣

山川や声をふり蝉ハ聖を鳴　平角

蝉鳴や綱入にり舩の内　桂雲

蝉の鳴木ハ花よりも静之　荒卯

旅人をおもひやりけり蝉の声　卓池

鳴もせし唖蝉ハ中さ哀なり　康人

鳴立て志つれるゐ山の蝉　護物

蝉なくやわれくるさ城の人　麦之

蝉の声にうつくや八百なり　米堯

唖蝉は呆けに草をとりけり　回人

蝉ハおし仲そぬかそや文我　宅河

蝉は声を遂にしおんなやかり舟　（甚河）菅雅

蝉時雨つゝみにそれ湧ぼれ　湘舟

蝉鳴や池個の牛の莫の上　（尼）素月

夏の蝉人ゑとて鳴けり　久蔵

蝉鳴や子供の荒れ影の岩　（尾張）吐山

苔ふる蝉一声や夜の松　（遠江）鯖房

山蝉や登戸の小水のいそしき　ヽ　百枝

蝉鳴や眠ふさけハ孫の井　（陸奥）天山

蝉鳴やうらけの草を刈捨る　寸千布

青草の枕作らん蝉の声　東丸

笠の表の重みにたる蝉の声　（尾張）龍眉

鼻節に押あてけり蝉の声　（女）文元

蚊

蚊のうつるまもなくハすに蝉の吟　古節

古井戸や蚊に飛魚の音くらし　蕪村

上風に蚊の流行野川かな　仝

まれつらし起ハ蚊を焼君か貌　几董

むす帰してちやおそて蚊ゐる書や存ん　二柳

竹伐て蚊のおもきさ夕かな　尼旋

さし入や人をうかて蚊の仏　保吉

玉の緒それとや焼れて鳴蚊かな　出羽　南順

蚊の声ハ松ふきて浮る月夜かな　岱青

よし田やの蚊にくはれけり伊吹山　大江丸

蚊ひとつをのかれくたる葬かな　松兄

蚊はりや辨人の足に取りさし　士朗

蚊みえて井に立捨てある灯かな　長翠

蚊のこゑにくされおそてにつみかゝり　仝

蚊みえてしの氣にちへしカかな　女　秀久

身に蚊みえてその手柄によりかゝる　諶六

芝より蚊のわる首によりかゝり　巣兆

蚊の声の水についたる夜かな　柳荘

蚊ひとつにまてや迯さく夕かな　乙二

出そめし蚊を見てみれハ嬉しかり　道彦

小床や蟹とられて蚊の迷ひ　仝

猶手枕蚊ハ君か代にうらしきかな　一茶

坂のおりや挽る首の淋しき　冥ヽ
坂ひとつにうしろ揚る灰になり　長高
宵鍬の豆腐明りの薮坂かな　一茶
菜の花坂やつ雪より出てゆきを見る　平角
坂口や菜より起る芳の雲　三津人
風筋にまだ抛ち坂も明れ　石涛
坂に捨るりやこともう辞へる　五老
夕暮や明ぬ坂の出て月に有る　信濃 杜學
庭松に酒吹て坂をたてるもんヽ　可笑
片つ坂をとゞ下おり捨ぬ世かなさて　蕎嫣
尾ふさつ人も坂にくたれけり　陸奥女 つ由

坂柳

坂の峰ゆ尤し雀の小さわりヽ　無底
見ても坂の森しら梅八百の雲　播磨 春来
坂の上り下一日ほしおの音ときき　圭良
見しき坂の初あり人ヶ作の月　古節
坂柳や蕗の花のちる春より　曉臺
坂柳や梅咲つける灰にかりそ　蕉雨
坂柳やありより古き新の松　讃岐 霜操
坂柳の隣ほのくところの月　越後 牧童
坂柳のかへのうちまさ枝かれ　一茶
坂柳へつゝけて柳く車かな　東青
坂柳や侭つれしして残る月　由之

蚊遣火

蚊柱をゆるがす風もなき夜かな　流芳 魯白
蚊遣火の烟の末に鳴蚊かな　白雄
隠家の夢そ来にかゝる蚊遣かな　葛古
家々や細き蚊遣のりときき　東 耳孝
蚊遣火にむせておのれと消之　保吉
山里の蚊遣ハ山の匂ひかな　公
夕くれし蚊遣をへつる岡の家　跨石
蚊遣火のけふりて葛も嵐かな　松兒
涼うつや蚊遣き盡ての二日の月　升六
打のけ手に軒の蚊遣やゆく野　葉兆
松に出てそれさへも蚊のさらすかな　安房 世学
世の中ハ山のあれたも蚊遣かな　成美
木さけに雨をまもる蚊遣かな　乙旦
蛍にうすものかけて蚊遣かな　年仏
蚊遣まも月さも宵の松の枝　又旌
蚊遣火や扇のつかれ草の家　可都里
蚊遣火や堀川の鳴も其まり　蒼三
蚊遣火の中から眺る横ヶ岡　不寒
蚊遣火に走込や燈の面　槐翁
蚊にもろき洞みけなる蚊遣かな　武陵
世の中の手のて蚊遣のうしろ山　等笠
蚊遣たくあたりや竹につかれて　申翁

蚊遣火

蚊いぶしもなぐさみになる獨り哉　一茶

昼の蚊遣なくてもすめるくらし哉　魯隠

さえられハ湫の柄ある蚊遣哉　秋夫

起されて手伝ふ秋の蚊遣哉　ちう　佛霞

十五夜の月もしられ蚊遣哉　夜来

きこ山の空にゆりこむ蚊遣哉　椿園

蚊遣火や外のあるじも人の佗　鬼洞

宵よりし花の枯枝を蚊遣哉　尾張　而后

うかうかとのなれ迎たる蚊遣哉　其映

月の夜のうら明りある手ぶりかな　紀州　天弓

夢見も千もし見捨れハ蚊遣火　順九

蛍

蛍火や散る露やね橋の裏　柳尻

蛍売すゞしの外や見ゆるなり　暁茎

蛍のうへ風吹て居る哉　仝

追れても月にかくれて居る哉　兼吉

朽れの舩の裏から蛍哉　誉お

流や蛍賣人も謡ふ夜の雲　白旗

松も松や清んとしてかり蛍　仝

宵あつて濡ものさそふ蛍哉　栗叟

出追ふてしまれにうつれ蛍かな　仝

えれくや露に葉たれハ流蛍　保吉

月の夜ハ地にかけうつる蛍哉　吉麓

夕暮や蛍ありつに定めなり　戸園

来ねさうて雨のなかに呼蛍　五颯

さまよへるにより帰る蛍かれ　代青

降雨の江及天ハミ流る蛍かれ　仝

於女とものはしかる上を飛蛍　半入

傘に思ひて戻るはるかに　江戸　梅人

藻屑ともなりて夜明の蛍かな　澄城

汐風の松を離るし居るかれ　旭丸

ちる蛍嵐の花の風吹けり　青峨

何下諸の人つれるし初蛍　長翠

人よりもあらて去つくし蛍哉　東　蘭岳

雲晴や大井原をとり蛍　士朗

されまのれいそいうるも蛍来た　成美

巻尺さし山の高さを飛蛍　仝

蛍窓に消ると見えて月に入　文左

涌光の夜もかくてかり飛蛍　完来

淋しさの雲も持かり飛蛍　喜年

いつの蛍箱ふく良夜にてとびかり　鹿杖

風さはる萩をすりん蛍かな　可都里

身につくとおもふ夜毎の蛍かな　仝

筆おいて子に蛍とる手習辺かな　如泥

織姫の袖いろそ飛蛍　心非

むれちやる蛍を誘ふほたるかな　一草
何草も夜の草と花ほたる　大阜
瀧の音に消る汎中より蛍　道亮
蛍火や灌る岩承の水のうけ　乙二
山の揚れ客も蛍も夜明に　仝
山陰やきりの名をきり蛍　蓑亭
おりろうか水かくれて花蛍　瓜坊
粉のさかれくきさ声を花蛍　寄閑
枝木の実買中れて花ほたる　木海
はしを近て草に蛍をつなぎけり　塊翁
こうれ後て蝶と月なく秋の版　寛松

花ほたる鳴音もなくてみなとかな　魯隠
杉の葉る来ふかうてこそ蛍かな　壱旗
松杉の梢より落てほたるかな　長斎
近寄の蛍とりけりや小松ちら　等光
たんとみておとけて追ふ蛍かな　白人
草花も蒙の音するほたるかな　蕉白
されしとや蛍雲の夜の音　玉屑
ゆけ蛍とかく人のふところに　一茶
てらやうに蛍ちらり落り夜　梅閑
石の火といふもあらん花蛍　亜渓
鷺のたゝ火の見えて渡り蛍　方明

蛍とぶつと宵ハ尾に小風ふて　万和

手のとゞく流よで来てハり蛍　尾張尼　周樹

硯にも新して見せて初蛍　湖中

ひとよりも新ある草の蛍かな　大和　蘭鶯

淋書の唄も蛍の夜明ふ　與人

松風の中ハ障子の夜之かり　女　きく

花蛍ちらさるゝて夜の明ける　筑後　其成

春ふに蛍やこゝと来まかり　梅翠

深くの夜より蛍と来たり　似鳳

雷の夜ふしつゝ之飛ほたる　南暁

蛍火や家ふれ寄しても哉ふて　武蔵　國村

消れハ猶なつかしき蛍かな　出羽　和友

押合ぬやうにほたるの光かな　安藝　呂調

ほたる来た庭の宿のちらねうた　北尾

硝子も見も見つゝ飛ほたる　筑後　東路

左のおもき簾に来てつ蛍かな　尾張　貫天

りあるそのにようて蛍かな　〻　白樹

手ひろや家とほたるこゝろ迄　近江　春坡

憶ら宵ハ盛て飛ほたる　〻　三省

まの峯の松の下ゆく蛍かな　主　橋栄

笠の裏に吹かく夜之飛ほたる　尾張　黄山

山ににむすびあり飛蛍　下総　観之

すゞしさは家でよのいく夜居るゝ　三河 箕山

水草のあれは道に居るゝ　江戸 葦笠

青蠅のあつまる虫の居るゝ哉　古節

腐草化螢

よの字に蛍なるゝ見てあるし　竺鳥

夏蝶

屋舟の上にかりたり夕の蝶　青哉

行人のあとをまよふや文の蝶　安藝 李石

蜘子

蜘の子や糸引男が松　伊賀 軽舟

夕風にちれ出しかり袋蜘　大和 其秋

蠅虎

夕暮や蠅とる蜘の眼の光　伊勢 至江

飛時は蠅より蜘も尺とれたり　麦左

蠅

蠅はよそ分をたゝいて居る哉　菴お

雲信ら蠅うち払ふ風か所　仝

いつしかに上手になりぬ蠅たゝき　蕉左

蠅捕しての先を立めける　暁甚

罷ふしあらを逢ぬ蠅や瓜の皮　几董

社の蠅人の袂をうつりけり　岱圭

檜皮の神にも蠅のたかりけり　長翠

力なき蠅や尺とる良に蠅　道濤

蠅うちは家を上すらぬけれたり　一草

蠅追人は衣摺をすべる衣ふ　尺艾

松陰や蠅になしたる枝ハ笠　桂出

粥嘗て蠅打なれて蠅の葬ふ　月化

芋の葉や世の中よしと槐さく　一茶

槐きうつ時はちいさかんに　雪梲

様の戸やよき人ありて槐の花　江戸　小元

葉ごとの槐ほど哉秋や簾こし　菱子

氣をさま人とわきまふる斧の槐　杉長

苔むしにも寿り槐のつのりかな　武蔵　宥専

井中や川をたゝみよて京の槐　江戸　立志

蝙蝠

蝙蝠やむかしの京の槐扇　菟古

こふとりや月に夜ちりを立さかれ　暁暮

蝙蝠やむかひの女房こちを見る　基村

蝙蝠や門に淋気の日まれ元　保吉

蝙蝠や姥老をあふさきてり　尼　諸九

姥嵯か姥をとふ足もねまへし　嵩之

蝙蝠やうん世は雀ヶ嗚鋭　素郷

蝙蝠や昼とも夜ゝて人たのり　月化

橋の名を蝙蝠に覚れ多り　一草

蝙蝠の投ぐ料にする礼嵐　道彦

多りして蝙蝠の世をとりけり　一茶

蝙蝠の氣をうかゞする月夜かな　槐翁

蝙蝠やわかれくる暮れ　井眉

蝙蝠の樽の棚古にいくれたり　晩翠

蝙蝠や夜のわすれたる冷酒杯　美沙丈

水鳥巣

鳰〃や呉葺よりゝ良に花　陵賀
鳰の是気濡て柳かな　松旗
鳰〃に留主の鳰の浪かなれ　輪之
手のおふれを六ほりの世かゝるかな　泰人
つゝ〱まて魚のよる浮巣かな　呆叟
鳰たつや浮巣を浪の見る時　仝
鳰の巣に鳰のまもりて眠りけり　標堂
この白にあの上の底の浮巣かな　塊翁
漂ひつく浮巣に雲かゝり　三流人
忘られし鳰の浮巣のうきね哉　菊也
まよひつもあるゝれんて浮巣かな　寒松

見に行はるの出て行浮巣かな　梅洞
鳰の巣のまふ柳をまもれかな　子影
我はゆり見にけり鳰の浮巣かな　柔年
親鳥の羽に守り出し浮巣かな　釣叢
揺書かさいれからく浮巣かな　自丘
親鳥の浮巣なられて見えにけり　湖水
四阿に雲をとめて不鳴とこれ風　可醉
更りハ人声すときみ鶏かな　某叟
薗田刈てくれ子にはまつ麻かな　菟古
芸草に奥ハ足をたゝきしれ子かな　仝

水鶏

乃鶏なく方に答へつり　妾　暁壺

箸

寝月夜見ゆるかぎりはしかなる　百明
さしかゝる尾上は淀の鹿　布暁
楢の花ふさ出り鹿の声　岱青
白妙よく鹿にふむ雲の峯　蔣石
梢やハ花にかれ鳴に鹿　素川
取つ集ハ山丈揺れ鳴に鹿　眠九
村雨ゞ子すれハ出て来る秋鹿か　士朗
さまた人ハに鹿鳴ち年の門　仝
荻風やことに鳴夜の滝の音　仝
松風も夜ハ鹿のたより哉　桂五
白の月夜に鹿のはなれ見し　丈左

なれもさしてえ山鳴に鹿　百里
淋しさ舟をたゝねに鹿かな　葉兆
雨雲を巳が羽も鳴らしかな　完来
鷲眺るよりハおつとせきに鹿かな　丘高
つまえれハ鳴らしかたれ二声鳴　竹堂里
鈍揚てんの邪は哉き鳴　仝
恋人の夜の松も寝や鹿鳴　一箪
よふりと田を植て其しに鹿かな　心非
に鹿おりに見るハ三つやなり　乙二
なと来と聞をあけて鳴らしかな　寺閑
あれ白ふしてたゝらしん物かな　巨老

杉の青に月ゟ庭鳥よぶ野哉　魯隠

ほとゝぎす鳴夜明て蔽の宿かれ　蓑う

是ハ峰てみるもしらねほとゝぎす哉　月化

殊ち乃戸さゝぬ庭のほとゝぎす鳴　平角

ほとゝぎす鳴里の酒屋ハ峰まいり　楳堂

正直な家の東や鳴ほとゝぎす　蕉司

すゝむれハ小さき声ほとゝぎす哉　井肩

風はろくほとゝぎすへてを鳴ほとゝぎす　学笠

青柳も学ひしさるや鳴ほとゝぎす　護物

峰の夜をくゝりし佗来るほとゝぎす哉　三津人

ほとゝぎすの跡ゆかしの[illegible]前　于当

折もせはそゝれ鳴とつぶほとゝぎす哉　漫々

田のゑれほとゝぎすたれ不寝の宿　季耙

あし川蘭とゆくれほとゝぎす鳴ほとゝぎす　釣蕉

ふるつ来るほとゝぎすてもなりしやあれしき　揃明

田一枚あらつて来るほとゝぎす哉　尾張　永高

ほとゝぎすハほとゝぎすけやうて芦原笠　越後　粽帆

詠ふる息も飛ぶるほとゝぎす哉　詠陶

家ありハ鳴家あれハほとゝぎす哉　徐英

叩くほとゝぎす雲れやそしあるやん　女　應々

転篠する家やほとゝぎすあれましく流　摂津　二株

鳴ほとゝぎす泣て見てする月も出し　上野　雅合

鵜川

二ッ鳴て悲しさもなほ鵜舟かな　越後 子葳
まつれたく鵜は寄え鳥のよるかな　宮越女 今見
除白の火の夜ハ鵜かを河わたり　春思
老たりな鵜ハ寄ても来るやかな　古笄
まてはき白へも見かり鵜の篝　柳居
はやれ鵜ハ火をきらわれも泪かな　暁臺
売の鵜のふらをとろやむ篝かな　浣て
家近く鵜のあう庭る夜の時かな　蒂文
亡川を濁して下る鵜舟かな　蕪古
来て先や鵜をのかれたる魚濁し　華本
老たりし鵜ハ泪とし八丈ねかれ　仝

鵜の嘴ハ魚より出れハ風かな　尼旭
数の鵜ハ鵜匠ひとりに同し哉　仝
篝る夜の水ハさのみて鵜舟かな　伏青
鵜の嘴の飴見てハ寄らふ忘るゝか　保吉
鵜の狗ハ流るゝ鳥のなふハかな　仝
一たんハ戻りて見し鵜の篝　又明
篝消て舟ハうれ鵜そよりこ　士行
まつ戻しもふして通りゆく舟かな　仝
う鵜川夜の夜さしき見えたり　柳莊
可愛子ものさして出る鵜舟　蹊六
又羽きさ水ハ鵜の本哉し　花縣

のほりうや火ハめらめらと流るゝ　旺九
雲ちるや鉛らにうつる松の緑　外六
うきんの前れ火をともし月夜に　一醒
是淋し蝿に見えしられ鯰　年人
うきんやいつれさ見ても人の新　丘方
う洞まうひとわれたりに夜氣　乙二
夕くしきうれ是れにはすりね　仝
日の中も人めんかうう雨に　一草
指され一咽忘れて千将の人　及光
山風や是出てよ見ゝられ角　蒼虬
春し尺そりやうつよ流の雲　篁ゝ

風かし尺をて己れ火の見附に　仝
杉の世と舟に食とかう洞に　其ゝ
下るとても杉うし息ちかう洞に　素梁
う舟り泣八条の川辺に　椿堂
老松ものりりり月本中あに　少汝
須しく鐘の鳴迯むらあに　一茶
賊るらみ後うて人に村ふれたり　陸奥　齋子
挑子れ掠わけてみらう洞に　有斐
うきんの子やうつんの那しらん　安房　兩蟀
よをふりて笠の冠りうあに　土佐　吐風
玉子あるさの中を尺を衣う粉に　駿河　萬古

杓鴫

翡翠

羽抜鳥

人のまねうつの池打くゞり　（陸奥）雨毘

文の戻に打まこつけさるゝ川人　古笄

川風やうち鴫てふ不まよに　几董

翡翠の風をはうるとて其ゆふり　蕪古

竹隗し杓を翡翠の小構に　白雄

立よらで千鋭翡翠ゝ泳て竹のまり　百明

川蝉やまた夜まる磯到松　完来

沸しさゝ千鋭の翡翠の嘴に魚也ぜに　来卿

追よて枝に去房く羽抜鳥　又明

鶏山に捨って来り羽抜鳥　言古

雲の子のれ小草をふみ羽抜鳥　春鴻

鴨子

軽鳧子

鹿袋角

鹿子

羽抜鳥友でまはれぬ我もなし　菖之

ある日を一声もなき羽抜鳥　瑰翁

嘴にまさ屑おそて羽抜より　末芳

羽抜鳥鵜の雫にぬれし哉　ゝ　魚遊

鴨の子れ生れ立より月夜かな　芳之

かゝる子不出つるもたる夜の月　（支狭）貫危

松風をこめてや鹿の袋角　（紀ふ）子億

八九月鹿子見送る林かれ　卜椎

子あれ筑河を鹿子見えなし　仝

又ッ六ッ際ふまつる鹿子かな　斗入

痩世の子れ母を枕に鹿子かな　存亜

鹿の子は常にとゝく桜の実　吉川
草の戸に宿りしつゆの夜鹿子かな　照九
子をなでゝも鹿は哀なり痩ごゝろ　道光
月かげの下にてはみるね鹿子哉　寿閣
旅の手にはしまれやせぬ鹿子哉　乙二
馳走しよそのうちハ来ね鹿子哉　蒼虬
鹿の子の後追そめり小道哉　夢雨
草の葉に伏てやるし鹿子哉　蕉句
ますゝ芝に蹄跡つけし鹿子哉　嵯堂
棗の実に添や鹿子の鼻柱　玄蛙
見えしらねふりや鹿子の通り道　麦古

すゞしさの乳首にたらし鹿の扱　可磨
きのこれて鹿の子かくれつ松ヶ妻　老　微風

夏鹿

むし菜をさへ子に分れなれて鹿の駅　肯谷
鹿の駅篠にや風のたよりかり　一草

照射

莢巻に消されて戻るともし哉　覚左
よしすゝき実にたつは峰の雲　保吉
折角と消るともしよりけさ　士朗
恋しらね奴であるいてともしする　照九
草臥ふせて忘れぬともし哉　寛松
釈は子（イの字）は子はともして鹿や哀れ　護物

火串

暁は古れのともしのほくしかれ　素史

干鰒

小鯵

ほしふりて獺(サチヤ)矣をなく小淵かな　白椎

拳の杓の火串ふる一栗かな　保吉

よる床や並て背中のとがる哉　班象

背中見て寐や抱らん松の露　午人

夜山の背中ハ幡の魚板かな　屠狩

松丸衣ちるさくらへかれ　蒼凱

わかの山の突すも背中かな　（和泉）嘴笛

ほしならぬまのふを賜む人もあり　（さつ）林風

干ふるや又菱ゆく段の泉　恕交

又風や次ならばれ鰺賣　夢左

又菱ハ調ぞなる小鯵かな　仝

海老鼠

有無日

五月見

五月忌

五月雨

鯵賣や並みうちち出る人の中　寅松

又鯵のおりまぁ新の屋かな　魚隠

こそふりて見ぬさら隠れ浜中の口　稚闌

ありなしのりより杖をゆるされし　（下総）玉斧

見舞れ月の百花さる子猿かれ　（常陸）車竜

見ならなれりまも棒てみれ勢かれ　（出羽）小池人

やり木の風さく五月見かれ　梅何

菜の山や軒やりする五月雪　三津人

五月見や楮の背なれてちらん良　柳荒

気晴して廊下通ろや五月哉　英和

五月雨れて並りけ月ふれ　仝

空鏡の池たまさん又月る日　暁台
り鳥ろき城の寺え九や又月る日　仝
又月る見や东ろ夜乃そら杉の月　蕪左
又月る見や折しくたる作の蛛　樗良
仮初ハ降出しけり又月る日　旨樵
のされ夜ハてこれもふつろきさるて　仝
又月る日より火走んとなりなり　尸　梅人
色ろ日や左发漫とく又月る　保吉
又月る見ハ松しろうちを好れ　美二
美人了るこ年の暁ろや又月る　又吟
ての頃ハふうともいきん又月る　存亜

又月る日や七粧のわけたる人の良　松兄
又月る十ゆうんとうかん八般称　匝九
又月る見や藪ム雀の啼ほそる　仝
又月る日八南天の花のうとさるる　士竹
又月る日や新より落る夜や女子　仝
又月る見や柿も撰も友の子　呈篁
又月るのふうもいそねム気れ　雲洞
又月る見や枕を接る粉名之字　長翠
勧月八年の中つうし又月る日　蓮叟　芳角
出る八年こし夜ちりね又月る　樗雪
又月る見や枕りるる葉の奥　栄兆

起臥の人先なりかんこ鳥　丈方
かんこ鳥やとこてうきく乱うく　素岱
かんこ鳥我よの山もなかりけり　沙羅
篝火の夕は宿あるかんこ鳥　きせ（女）
きゝゐて井にこ友の懐かれ　成貞
かんこ鳥我手それの末もなのか　仝
又暮ぬさうりしさくれかんこ鳥　完来
さびしさとおれおくりしかんこ鳥　年人
暮る我かんこ鳥のふて茶れ芽井　可都望
かんこ鳥日足つる情けり小盃　仝
かんこ鳥や雨の中に次りしら　不寒

かんこ鳥をおしの庵へ旅路の空　月居
かんこ鳥にうらさて松かね旅衣　仝
かんこ鳥も濡にちりぬうほとす　道彦
かんこ鳥や雲霧見ての夕見家　仝
かんこ鳥我もむかし秋の眺め　乙二
かんこ鳥の只暁むしや美たく　蒼虬
かんこ鳥や家のうちまて鳴移　岳輅
篝火は木にかりもとかんこ鳥　蓑千
かんこ鳥や人らしられぬ筆花　一茶
かんこ鳥我そたらとこ是く非の作　申高
声鳴れ日鳴あしかんこ鳥　尊隠

牡丹や朝に汁されちりける　桂山

ちりけるは外にさきけり左ほれ　一葉

ちりけるや枝の鳥の声をふむ　瓦全

ちりけるに戸ささぬる庵かれ　常笠

ちりけるや雨も葉にちられて　直白

大きうて千ちりける次の梢　武陵

ちりけるや枝て実をもつ朝の草　卓池

さりくと篝ける人やさびしかろ　寒松

ちりけるやいつ咲くと見き豆の花　対山

ちりけるや暁し夜見れば天の河　（江戸）錦浦

八河やそ峰としくちりける　女 志宇

あけらたく夢の別つてちりける　君恕

ちりけるも見てを眺めて外の声　僕岱

外しくれたる夜の声やさそふ　竹坡

ちりけるや嵐にとられし沖の魚　（荒地）蓑足

引につかしきれてそ流れちりける　不韓

木とよそと別合ふる中のちりけれ　梅同

竹は水に子ちりける中の庭　双烏

鉢あるさの明きれちりける　丞摩

ちりけるや山あちさるの花ましし　湖澗

あつる夜のうたく妹しちりける　（陸奥）東扇

ちりける暮や葉に流しむ立ちに　宇柏

梅雨

柴の戸や五月雨くさき干大根　圭兄

五月雨や家のまはりの水のかさ　岐来

芝も降出しさり五月雨る　江戸　硯高

池の子あたるゝさりね五月雨る　伊賀　力哉

五月雨や俤深き芽をさやし庵　古節

入梅やひま鼻通さるゝ蝿かな　白槿

黄ばみしてまそかされたるつりかな　仝

枇杷のたわゝ赤き入梅かな　保吉

ようしく入梅なりし蓄論かな　祐昌

梅雨ん説も至れ見ゆる之　兄直

梅雨叢さ刈り湯る煙　道光

梅雨晴

多くまては入梅なる凡邦の松　等光

なりはつる竃雀はそれて入梅かな　梧園

入梅晴や禅つゞきのひまなし　菫古

大船を見ればあゐ入梅かなりなし　可然

五月闇

年置もそれ五月ぬなりしやさ　乃亮

人のりは道はある五月闇　北海　杉壺

五月晴

五月雲深しるしたり鶏の絵　全境

おうちと尾長鳴なり五月晴　阿量

五月晴さうりとはするゆかしかな　鶩少

つりにしかて来るり五月晴　箱根　双鳥

しみを見まで晴るり五月る　鳴雄

虎ヶ雨　ふりそめにひとつまゝりし虎か雨　蕪古

短夜

短夜や千句も果ず山の数　行解

短夜や芝生をこゆる垣の人ま　無お

短夜や毛虫の上に露の玉　仝

九月八月夜ハ短夜とおもふなり　暁臺

短夜や丑寅のよねぬなし　白旄

短夜や伽羅の匂の移ふ衾　几董

蘇りたり短夜あけぬ枕　保吉

三日月にちや短夜のうつりかり　蘿城

短夜や隣りの嘉に於のゝ声　淅江

短夜や関東に残る笠の露　士朗

鹿の尾に短夜の月かゝりけり　長翠

短夜や火のひとつ風もつかれしそ　可都里

短夜のあけしまき梓の二階花　成美

短夜や人に見えて鑿の穴　完来

壱里の短夜残るよしかれ　不寒

ミしか夜の明るゝや竹の風　女　百杵

短夜を捧るや牡丹の花の上　乙二

短夜ハ淡月ゐる猫もかれ　仝

汲治か火に短夜青く明にけり　月化

短夜ハあやくむる蓮も見えぬ　月居

ミしかよを見るに竹の垣手ぬ　素檗

満月に出ても短き夜はなれ　中為

短夜といへてつ色ね山の端　素卿

是れさへ短き夜や夢みつゝ　武陵

打のしさや夜の短さも花にうち　袁丁

短夜ん前の風雅直りけり　一葉

短夜に戸春まで来より飛の舞　陸奥 旦茶

短夜のさゝめけ云りけりの声　許光

短夜といふ人山にのほりけり　山城 莽ノ梅

短夜や蚕に蝶を見もしせん　信濃 美敬

こしかたは暁より近くなのゝえ　陸奥 十升

短夜は夢みとよりゆれけり　能登 其米

明易夜

短夜を使ふて失る松むら　女 武く

嵐の抜けるゆうれ短し夜のき　江戸 車両

きみうれ夜も短しとやなり　出羽 葉丈

短夜を提てかゝる千花の宮　久蔵

短夜にをりわきのほり床　丹後 免鶴

短夜みもしを立つ堀の笑　香風

短夜や業消ゑに明きけれ　江戸 梅卿

短夜や千それおなしの色ゝ鳴　信濃 可考

こしかたを出づれるのかりけり　岐山

明易き夜や稲妻の鞘もしと　陸奥 姜术

明いらく夜の夢しや千升の月　几董

夏夜

明安や夜を泣児の病かれ　白雄
郡を作る家を隣に明安き　如毛
明安き夜の月も人に二三子の　麦卿
明安き夜をとり出の間かな　学笠
明安や夜半や乙子の歎きても　巡嘯
明安や夜を泣鼓の時きすのこ　星濤
明安や夜さへ荷し戸の前て水　梅実
明いそく夜をさる寐し又借の家　下野　其大
浪と松押合ふて夜の明安き　丹波　白路
人ねれや也時夏の夜明かな　蕉左
夏の夜のたへぬかれに有の月　岱左

夏の夜ハ猿に起て也蚊の厨　五明
夏の夜や旅ハ岸とある宿に蚊家　旭丸
月とあるとよもなれする夏の夜半　士朗
夏の夜ハそれにも黒し山の上　有山
旅人の夏の夜をとり出かれ尓　杜口
夏の夜ハ弓張月に老しなりね　巣兆
夏の夜を毎日松に船かたれ　朱英
月星の子に手をそ夏の夜一時　蔦三
いつまても夏の夜ハあれかと存　葵亭
夏の夜ハ鵜にも飛ても明にけり　桂堂
むつかしき夜ハ夏に有りぬれ庵　長斎

夏月

夏の夜や二都して見るさくら花　一葉
夏の夜やとりくつね甚涼　寛松
夏の夜やあるゝ〳〵に月の出る　瑞子
夏の夜を簾巻もしたる捧さまに　玄漣
夏の夜ハ人に印の杉あれかし　安藝 宇良
川むかひ見て飛るハ誰そ夏の月　樗良
買て来る鉢に涼たり夏の月　董之
雪山より市の手のうち夏の月　仝
壹岐泊兵船や十夏の月　其朮
夜ありと望人あり十夏の月　仝
君うれしさ端しハ誰そ子夏の月　白梵

町中を逃ける流れ夏の月　仝
あ上る宮筋ありて夏の月　宋更
夜さき人の柱に頭あり夏の月　保吉
村百のきそれおかり夏の月　岱喜
夏の月人ははなれ小舟かな　斗入
夏の月すれてさあらん出船かな　仝
口近きむかしの恋や夏の月　大江丸
丸常のむすふも辛し夏の月　又昨
夏の月やれ〳〵しくも見ゆるかな　士朗
船の行のよれ更たり夏の月　恒丸
夏の月名もなき流よそれ　琴六

夏の月手にとれてみれてもとの土　里笠
世忘の風かくなり夏の月　樗堂
杉むらを見こしけれ夏の月　仝
向岡の家入て涼さり夏の月　華洞
涼しさと人にハ訓て夏の月　朱良
夏の月人をとゞむ心あらし　仝
はれたらぬ戸ハさしたるも夏の月　兄直
舟人に見ゆ物なん夏の月　完来
夏の月家家晴て灯かな　年人
菴極て志つかに今夏の月　可都里
うちハなちて出れハ寒し夏の月　道彦

また宵は涼もやすらん夏の月　仝
稿書の机の跡も更や夏の月　月居
傾くと涼る枝にも今や夏の月　仝
山の井に影すみての夏の月　乙二
山人ハ山家られや夏の月　仝
夏の月さし出まきる木かな　九化
暁の中まてすせ夏の月　寘ゝ
岩山や竹からさて夏の月　素閣
夏の月牛の哭も涼るなる　岳輅
夏の月とりてれたるさゝり水　魯隠
尼に見る薮か出来るく夏の月　麦雄

ごゆよりあかさかまて夏の月　芭蕉

稲妻の二夜かれたる[illegible]の月　蕉白

涼しかりて眠ぬ夏の月　笱老

ついて来て家田の上の夏の月　電権

夏の月つ[illegible]八清き菓子売り　宇笠

子出れの[illegible]りとおり夏の月　[illegible]

衣さの[illegible]れ八見えん夏の月　其里

夏の月松より出ぬを[illegible]見ぬ　楼里

夏の月いつもまやしとおもひけり　幽晴

さんらりと涸[illegible]りし夏の月　三[illegible]人

小車の巻あふりし夏の月　少汝

白れ刈て都れおろり夏の月　芳人

家もて八籠もむつし夏の月　漫く

夏[illegible]れ道ゆられ夏の月　桐楊

[illegible]れ去汲まて夏のつき　（近江）洪園

汲みたれ井筒に出し夏の月　（讃岐）菟状

松すゝし一夜くの月出なり　（筑後）双烏

小屏風の外にて山家の夏の月　（京）子崖

夏の月柳[illegible]れ[illegible]　胡準

家茶八何よりゝ夏の月　（武蔵）岩若

[illegible]の毛のやとさまて見えぬ夏の月　（伏見）丈[illegible]

清さ[illegible]れ夏の月夜や[illegible]訓[illegible]　（讃岐）眠[illegible]

夏の月ぬれさかりて光けり　江戸 心非

戸へ出てすゞしくて夏の月　金堤

洗ひ足て白髪てりある夏の月　梅閣

月の夜は夏のうかり櫂かな　讃岐 蝶老

岸を退氣はめぐりて夏の月　淀谷 扇岩

あまり見てさへしらり夏の月　東美

夏の月またたる山に入れけり　陶里

桐の木にあかぜんたり夏の月　播磨 亀仙

夏の月の義をさすかな月夜かな　尾張 米汁

田おりて夏は月あれまなし六　江戸 素凡

夏の月おかの寝られ眠れけり　尾張 鷲凡

蚊帳

夏のうきよけらましの月夜かな　出羽 文昭

夏の詩あたらは月の寝ざめかな　泰一

扇もち曲て出たり夏の月　伊豆 省己

見て居れは間もなし夏の月　安芸女 其夕

夏の月枝をあられて出にけり　去節

身ひつれ涼しき蚊帳の四隅かな　蕉古

客立て蚊帳つりかへし月夜かな　仝

あらすし蘇吹蚊屋も根なし哉　菴お

蚊帳を出て向に有る月の夜は眠ね　仝

老のくは寝ぎ枕を蚊やの月　白梅

蚊帳まで蚊よりも蚊帳の二これ　保吉

老なれ伸する足も故郷の弁
たゝみ忘れ白さし入る枕哉
ミより来れ蜻も追出る月夜かな
捺て見れハ月に飛ぶる蜻の内
粒良も久良も来た蜻の邪
故郷の月汐見の小風柳かな
月ハ故郷に墨てそろりと出にけり
引よせて松葉さしけり蜻の吃
へたゝれハむのまつし蜻の月
夜ぎり故郷もんの涼しさかな
蜻の月たきも人くらもかなかなり

春郊
雲江
銘呂
順丸
肩山
長翠
標芝
仝
丈左
完来
年人

白の夜ハ故やのもやうのうかりけり
蜻ハ弱より一隅たしね枝柁
蜻泊て世ハうれまそと探たり
蜻越はちるハ柳や志ぬし
人の身も露にすむ虫や蜻の月
うやつるねうちや草木の夕ひかぬ
り蛻の消れからやの句れかね
山の月のたよりうつされ故状れ
蜻菁生や故郷一つとそむつましき
皆の声や冬まもうる秋の空
蜻つれハ田畑うちれ見ゆるえ

山 白柳
月流
九化
岳格
梅價
箒老
備中 斗和
游晴
蒼岡
三保人
由石 叡笑

紙帳

帳つりねもりもやすし山の家　文角

よるゝも迫るもおもり帳の風　麦士

我もひもひとつにきる紙帳の中　秋古

旦すれて出る紙帳にもれる月夜かな　（尾張）呈祿

酔さめや紙帳にうかる山の猿　古亮

まつと帳釣上るゆふべかな　（駿河）桃舟

破れて戸さゝね里の月夜かな　（阿波）子紀

釣初て這入て見たり帳の中　塗氷

業平の谷でみるくて紙帳かな　蒼古

家舞ハ紙帳ふきて寐うよや　仝

人待には紙帳もあけれ旅の寒　李丸

帷子

おもしろい雨や紙帳に青松葉　三河人

蒼朮はむさくるし紙帳かな　其文

松風のひよきまくらや紙帳かれ　（尾張女）挺好

帷子は浅黄に男なりけれ　冨叉

帷子は硎し白や山躑　（女）きせ

帷子は家居と人は皺ならし　吉牛

帷子や風のそよぐは身の上　乙二

森ひとつは帷子付の馬出かな　仝

帷子は白きころも山路かな、　李承

帷子は朝より暮は重たかな　其こ

帷子や人のこゝろぐ芦の風　李閑

よの友も扇子する日十めく　道彦

扇子の月夜湯しま嫁入れ　護物

扇子れおひのるの志まゝ来る　星濤

扇子れきそしく竹の夜風れ　雉啄

扇子や帆の夕風を衣桁まて　象風

扇子を忘てむつれぬり大硯　惟平

手すられぬ扇子すゝし叙の段　陸奥 芳蘭

扇子や姉れ於たるおし娘　江戸 平馬

辻ゝ花

名枯枝康子するゝや辻ゝ花　不知足

こゝり子や溶色たるせしゝ花　年人

文羽織

まれかてかまれてつゝりし文羽織　几董

手のうふれ旗立洲し文羽折　完来

古竹もそよけ小風し文羽折　芙蓉

川越れあつけ命を人手の　伊勢 風角

膝脱れふゝれて信し文衣　又玄

娑の羽や世の人集れの文衣　長翠

被禳の美黨れ折るを白縮　自康

房物

晒衣ゝ笠やすゝしき京男　乾雀

晒布

こゝり子れ墨かいつけし晒か　蒐吉

子れほしと晒布揺く吹れゝり　樗堂

宅娑の前も見ゝゝり晒川　護物

旗人れ常ゝけゝり晒布揺　陸奥 去呈

俳諧発句題叢 夏下

樹立吉節 輯

六月

六月を掃れしや水あふち　蓬左

六月を夜の中しま笠の下　蹄石

六月は深き流をきさり帆　保吉

六月やおれり青きちく子哉　青川

六月や旅人にするの山　樗堂

六月を桜の葉延に乾菜かな　棠兆

六月を小城迄りてつれなり　丘高

六月や鷺の泥にとく鴇　万和

六月や夕暇色の一風情　寛松

水無月

六月も死る命もちからなり　三津人

六月の潮さし来る芝生かな　春岱

六月や海に走らす舟の帆る　鵬鞭

みな月や庭根をきよる家に遊ひ　闌更

みな月ハ寺の娘子の庵　伊勢　他力

何れたよりみな月の松の風　菜荒

みな月や入さの方の月あかき　一字

水無月や市のなかりね多くゝろ　右樵

みな月や朧に青き松の色　下総　桂丸

氷室

氷室ちかう訪れきれし咄かな　暁台

名花に侍て氷室に贈るかな　仝

氷嚙ハ身を氷室の構なれ　闌更

世の貴人多く井に氷のこゝろかな　白旋

のつとりに寄ると身に氷室かな　升六

氷の貢是とも清き日なり　午人

夏氷無し時様の色うかれ　素牛

名に寄てハ痩とる氷室もち　道光

御代にあり旅の古る氷室かな　出雲　白涯

くれたけの夏ハ氷室の役かな　大和　可亮

夏氷

いまそみるすゝれをあまり夏氷　江戸　老紡

氷餅

みな月はおわ家にハ氷餅　保言

氷餅ちゞけて見れハ月まれ　陸奥　蘭陽

一夜酒

一日の見るまのれんもん水餅り　竺高

ひと夜酒ても笋のそよつ時　道彦

松風といふ名もあらんひと夜酒　斉東吟

祇園会

長刀鉾や人声起るとひらつら　曉臺

祇園会や菖蒲の京も風薫る　蒼虬

簾いその見てすそいとし鉾の兒　几董

家子よそれへあそれは鉾の兒　大江丸

此とりれ前は見きん鉾の兒　其議

祇園会や八人の作市月去る　一茶

祇園会はのふれよふるや八人杏　道彦

つるめそれ先てかゝる娭うれ　尺艾

蕣さまく祇園会しもさみしも忘れ水　雪橋

扇なとに口あり祇園の入日かな　文角

百姓の謡見ゆるや祇園の会　讃州 雁赤

嘉定

十六銭宛先一や嘉定喰　萬古

子母銭もいつれかれ嘉定の日　讃鶴

坐頭納涼

りゑをせなかす座頭のすゞみ　他力

膝ますてつりとまし座頭達　道彦

すゞしさや琵琶素しなる座頭達　美沙丈

富士詣

見れはたゞ雲は千ゝそ不尽もなし　尾州 凡求

境ふむ雨は打はれて不尽詣　蒼栄

雲にいる人うるへしふし詣　鹿来

嫁の名数まもへらぬ見ぬふりして　江戸女 淑風

鞍馬竹伐

竹伐や竃の灰汲を送せても　一瘤

山梔子や竹伐ハまてる気色なし　道彦

半夏生

因みれハ遅速の見ゆれ半夏生　浪花 竹斎

西方ハ涼たる旬良も半夏生　宇橋

土用

よく見れハ葉蒼む土用かな　保吉

み畠や土用の入を鳴うしん　一草

つれ〳〵雨も落つく土用入　道彦

をしみれよられてまつ土用かな　旦之

虫干

虫干や壇の千島緑屋　宗瑞

母人の振袖見たり土用干　武蔵 得牛

湯の書ハほとなうし土用干　圃叟

虫干やうつれ見しつる恋　凡律

虫干や女の羽折しほりまで　萬古

虫干や世にある人の暑さかな　百明

虫干や華に久しき折まれり　白雄

ふみ戸や手仏の前を土用干　一醒

夏日

夏の日も暮るゝそての江の柳　武陵

夏の日を尺蠖の歩みかな　集静

暑

青雲の流れをうしなふ暑さかな　亀醇

暑き日や枕ひとつを持ありき　蝶夢

その頃の蝶々人悪き暑さかな　蓮古

大津画に丹の色たる涼かな　仝

いと口の乱て涼きまえかな　暁臺

りんかの浮雲涼き姿りかな　白雄

りゆりの花に織るあつさかな　蓼太

端居して書写を涼る涼かな　仝

門涼しや出に雲迎ふの皮　勢 弘臣

松に花の露て地にたつ涼かな　鳳律

涼りや月をとられたる市の灯　保吉

ふれよれかゝる又涼き光かな　祐昌

涼りやとり集たる子に雲　士朗

涼りや小庭の松に迎ひけり　仝

大塚の里をありく涼かな　仝

涼りや折りく掛る足の砂　松兄

涼りや人の肩を二本まで　木僊

火をとて涼さしつむるひとりかな　隣家

涼りを押志つかり碁の上まで　朱英

酌搭に女の多き涼かな　完来

身ひつれ涼をさゝれ浜いかし　扇杖

つゝとく人に過れぬ涼かな　可都里

涼りや百ふりかりふりさして　瓦全

涼くも波末ゑゝる気見え　月居

涼りや百合の後さまる子の中　素檗

暑き日や立寄る陰もうるしの木　壱桂
咄迄人の名暑き日かけに　平角
暑さには眠を休むる寿かな　瑞弓
日さかりもこれほど人き暑かな　白壇
暑さ不筆も見る嵐にも　卓池
折りも一丈をつる暑かな　雑冰
むつかしや暑さを人の上に来て　（越後）史千
暑き日や黄塵の跡に隣松葉　（流山）白鳥
暑さには洗ふしたる足洗ふ　（飛驒）求古
ともに人あつさもあつし古手の子　（加賀）とくを
露の気を形にあつきかれ　（不尽）古径

うつし森のさむれは暑の暑に　（備前）百花
暑き日や汗すまきは風のふく　桂丸
十人は十色に凌ぐ暑かな　（下総）善可
暑さや下介あけ出し子の上　又訪
暑き日は火桶見てみるひとりかな　李峯
暑き日や帆しずみの八海の上　（讃州）頌孝
暑き日や角力とりの来る寺の前　古節

炎天

炎天や飛へ鳥る箒の先　三休人
炎天の句は吹海の風　緩髪
炎天やしばしこむ蟹の穴　鶯女

日盛

日盛や白鷺そいる案山子上　可隠

夕立

日盛はまして見ゆ激しかれ　三津人
夕立に打たれ切たる池中かな　可酔
夕立や只一打にまくれ原　暁台
夕立や取りもめぐる人ハなし　百明
夕立や門脇殿の人たまり　蕪村
夕立や草葉をつかむ村雀　仝
夕立や流出たるむしれ哉　白雄
白雨にその野良ハかへりけり　尼 諸九
斧の音東の里ハ夕立に　保吉
うら家や夕立かりて草きらふ　仝
夕立のなごりも見れる山家かな　隣石

夕立や蠅らちらしく　江戸 梅人
夕立や雀おしこむ竹の中　成吉
唐庭や夕立の跡の松柏　祐昌
夕立や執て火を貴籔の家　士朗
夕立や世ハ是よりもしほしき　米翁
夕立やふる雲にさふ河原風　可都里
夕立や志つかにおり筏さし　眉斎
夕立や二度に日暮る峰の松　一茶
夕立のふりも尽さぬ草の原　長翁
夕立の前の音そいそうし吏　道彦
夕立の跡も白くて花の咲　岳輅

夕立の十歩やんで深山めく　乙二

夕立や兜の上の足いそぐ　素琴

夕立のふり込む穴に蟻かな　菱彦

夕立の先へ月のり板かな　武陵

夕立の氣に昧くさし蓬の上　寿閣

夕立の跡橋わたる男かな　雲桂

きえてあとしたる夕立なりし　一栗

夕立は落葉吹きて桶かな　幽嘯

夕立の通りにありぬ簀に蟹　非殘

夕立の過て人すむ草かな　飛騨　錦史

夕立にやりとなる牛の舌　一蕙

夕立や麦の香わたる松の風　念堤

夕立や人も木の葉の行のまゝ　丹波　松〻丈

夕立はうしろに見えて月夜かな　帰坐

夕立やふられて帰る浪うち　壱岐　百湖

夕立や隣にかゝる蝶の足　三及

夕立や三日つゞいて草の松　虎眺

夕立のあとも大きなる月かな　古芳

夜雨

夜の雨非とよりきの起りかな　越中　呉山

行燈や匠も流る夜の雨　一醒

なつかしの浦見て流る今夜の雨　雲嵩

夜露

草のしつゝむれぬ穂に夜の露　吉笛

旱
雨乞
雲峯

貧報の高敵もふらぬひてりかな　蕪村
天六月民のおもひに晴るゝ哉　樗良
雨乞に曇る国司のなみだ哉　蕪村
雨乞やまた夕暮て晴松　嵩之
明ハちる岸の千さへなし雲の峯　暁台
雲の峯踏に小笹の吹崩し　仝
見てもく舩をよられ雲の峯　蓼太
出る月もつゝてりあり雲の峯　仝
白れる東ハ志らし夜雲の峯　蕪村
雲の峯白ますうその竹しめ之　白雄
雲の峯おのれ崩るゝ事もあり　仝

虎豹の住れあらはれて雲の峯　喜阿
下る時猶流の末や雲の峯　保吉
さまれぬれ夜ハくされて雲の峯　及晩
見るうちしきるれのかゝり雲の峯　斗入
月ならぬ拍子さかゆる雲の峯　士朗
雲の峯衰りて日ハ暮れたり　長翠
荒汁のとはし見られ雲の峯　米翁
雲の峯日ハ西へ入海の上　完来
蛤の口より立や雲の峯　三顧
桐の葉ハ明日もあらまして雲の峯　丘高
くふもまる藤る丈まれ雲の峯　一草

万麻らのゝかりあゝみ雲の峯　道彦

雲の峯大象肩に入ろとす　仝

夜明ハ夢やとらん雲の峯　武陵

醉ゝ眼のまれはれや雲の峯　鼻涼

吹きよゝ芦を根として雲の峯　雲堤

ゑるうろ月夜にあるや雲を友　仝

雲峯墳のうしろを塞ぐなり　巌風

まかくハ又尺にたりぬ雲の峯　之庵人

雲峯入日をたゝむ風情の　兼也

雲峯取付花の崩れけり　素琉

すゝしやとたのミし方に雲の峯　湖中

扇

おゝくとして崩るなり雲の峯　鷲宅

白鳥のあゆむほひろり雲の峯　（播ケ）和之

雲峯取さしよれハ子の雲　古考

ろ春に出れハ海雲の峯　（丹波）夏鼻

雲峯扇れもとゆるり　鼓東

ろ老て草鞋仕舞て雲の峯　李岸

まろしはふ草れあふるの扇かな　葦舟

流来て拾子によろあふきかな　几董

ゑつりへ要れなしろ扇の風　仝

竹手探るもに扇見えうえ　白榎

鍾淡ふ吹かれあろれ扇かな　素鴎

碑犯して牛の角うつ扇かな　保吉

芦刈のさしてとゞまる扇かな　希言

文見り扇の尽しも役なれ　米貝

忘れて何の世とする扇かな　瓦全

人の扇ゆしと何の手折もあり　真ゝ

軍しとはかりてかさす手ふきに　去角

夕暮の拙れつまる扇かな　一葉

白髪て書くし見む扇に　寛松

寄れおて演海さゆしや涌扇　等充

月の丸の扇なれ来る団丸に　大喬

悦光る筐さうちし扇かな　鳥謡

団扇

身ひけおうつれハやくし扇かれ　常笠

りゑや扇もうけて吹すかし　鑁也

比所や夜も扇のさしなき　濱藤

山中や扇にのするそのはかり　兆升

館夕の人ま志つけき扇かな　海南

羽わすれのふりもあり扇かり　竺角

さ流をまつまれ扇に　阿波　六功

桂つけの団つゞ見れ来るちらハかに　葦左

まゆすみれ出扇画なん手の汁　幸お

水て忘れ法咲ちらハ夜の雲　自楼

うさ藤の葉の悪ましらうちハかな　几董

一日に二度くる人のうちハかな　芝葉

白き扇禅の義をしかれけり　大江丸

洗引のうちハつかふや紀姫ひ　重厚

先心れハ肯もなる也洗うちハ　不明

先聴るちより吟ふり古うちハ　士朗

子のりも忘られやうちハ哉　ノ旦

うちハもつ人の心ハわからさき　米翁

洗うちハ彼をもさまもやすけれ　兄直

うちハうり梭の家に入れけり　（下総）半兜

床起うちハより見れけり　道彦

うちハもる手にうちしやすすの是　[illegible]

汗

汗拭

拭良

うちハ洗て先ずよろける夢かな　一茶

打出て見ても淋しきうちハかな　塊翁

のせて見る子のそれハされ洗うちハ　岳輅

旅人に涼まるうちハ貰ひけり　（武蔵）几帆

謎とける良やうちハの風かるき　茅丸

汚ひをとうとして弘る扇かな　（伊豫）長天

汗の玉ふるふに打はよの住　一茶

玉笹の団すゞしあまし汗ねぶる　道彦

汗まやけれどする嫁の花　基方

汗まや唖の娘の人となり　今

汗まやんとなくり遠く　乙二

日傘

曇りの人なつかしき掛ほか　（長門）圭道

掛ほやさえ井ても供のささ　（筑前）赤秋

降手の八松の古きやり傘　（備後）嘯月

單

弓よりみ常の細さたちむしろ　菴求

單涼しさむすを夢したり　白梅

單うしろハ力れたれたり　（周防）雁琴

わけ入てこ時そりりを　單　保吉

身ろつて竹れ凡ずむむ　單　又此

とさ多降凡そ来れ　單　雲蝶

單身を着流れ出したり　年人

乙勝の康らもえし　單　道先

單にすこしゆるしきのなし　單　以寧

芽洲し老木のかのさかしろ　松江

竹婦人

遂出や手拭かけし竹婦人　几董

去ねより打れてあきたり竹婦人　蒐古

此君と夜ハ川よそつ竹婦人　仝

泉ら世もほつれは也竹婦人　来英

元禄の人すそれは竹婦人　可都里

眠るや旅をいたる竹婦人　仝

皆と帯る夜をとうれ竹婦人　之涼人

竹奴

宇治原の足投かけつ竹奴　蒐古

人来しと隠れ出たり竹奴　丈古

抱籠

籠枕

涼

抱籠や夜明て見れは花芒　沙笠

吹ぬけて情ふかれし籠枕　及明

籠枕早しよしと云て寐入　道光

こゝちよき風は寐よや籠枕　蒼亭

枯竹の気に對して風すゞし　素丈

すゞしさや家仕舞たる井の雫　菴古

すゞ風や気にふるゝもなかりけり　樗良

すゞしさも明り消して居る月か　吟八基

竹すゞし古人也らんあり　仝

すゞしさは鏞（コノシロ）とう竿の雫　月艇

すゞしさや隣をさへる蔬の声　垂杉

二三町ふみてり足すゞし　江戸　沙言

すゞしさや花なき庭の秋の草　几董

すゞしさや草ふまさゞれ光なん　秋瓜

すゞしさや木を動して鳴雀　武吉

村雨や鶉の尾ふるふ草すゞし　保吉

すゞしさを寄して人の寐る夜かな　移石

月人の座てすゞしき姿かれ　仝

すゞしさは死ぬ蛇古さん一枕　天明

すゞしさや片よりて喰ふ鮒の波　斗入

すゞしさや見る方にふるつ星の瀧　梅人

すゞしやと以ふ也ハ老こゝる也　素川

すゞしさの寄くかゝる芋蔓に　雁珠
月すゞしきられ切さる山の上　恒丸
登り来てすゞしくしたり楼の上　士朗
月の出も見えてすゞしや松の間　仝
すゞしさや麻にふれたる吉蓮　若翁
すゞしさのひかりに余る茶筅に　樗堂
すゞしさは嬉しさは枕そつれなり　玉笠
すゞしさは田舎に見ゆる夫婦かな　業兆
すゞしさの人大なるは旅人之　青之
すゞしさやたゝれにみゆる老の良　米笑
すゞしさはいづれ命活ぬべき　仝

すゞしさや氣疎ん月に入　可都里
すゞ風や天の原よりつ田より　仝
すゞしさや搔もたさぬ松の露　不騫
すゞしさや子等の寐るハ夜の声の　定雅
見るはさへすゞし瀬の流れ哉　月化
すゞしさや下弦も爺婆も二人寝　道彦
すゞしさをいれひとあれなり麦の坂　仝
すゞしさのとりも出さぬ月夜哉　岳輅
衣桁をゆられてすゞし夜の船　平角
すゞしさや流ゑみつつ着てり　玉房
すゞしさは退て月ねく余世に　素迪

すゞしさや根笹に牛もつなかれて　蒼虬
すゞ風に麻のついたる門田かな　公
前よりて志ろくすゞし猫の声　篤老
銚涼や汁の実を釣る蓄の涼　一葉
すゞしさや松葉ちり来る蝸の殻　古嵩
すゞしさや蝉のとりつく竹篭　魯隠
すゞしさは流れの水の余りなり宵月夜　寄閑
すゞしさや人を見るくは浜の氣　白境
すゞしさを忘て寐る木下かな　麦弓
すゞしさの葛まゐるやその葛延　花芥
すゞしさや笠へかゝるも名残かな　常笠

またとらねまりはすゞし垣の竿　謙鶴
鍋すゞしまゐれて捨ふんより　三津人
雲清てすゞしくなりぬ夜の門　巽也
足ひやれよりてすゞしや水の渦　雲挽
森の宿に寝れ終すゞしや人の氣　僧　芦葊
すゞしさは退のけもされ小田の鷺　玄樵
引てるとすゞしうなりし蜂かな　鶩雲
人居とすゞし垣根も有りぬやく　對山
風すゞし枕はとれる山越て　百孝
すゞしさや笹の葉ずれし竹の友　小里人
すゞしさや小竹葉の匂ふ笹の枝　文角

家のうれさもすゞしき軒のつき　春哉

よみかゝる志てもすゞし家人　女　きよ

親の座を除てすゞしさ家は　萸南

山風のすゞしさでハ人も来れ　與人

すゞしさや身にうけ花のおち　武蔵　白寿

小よしれすゞしさうる木蔵か　路丈

すゞしさや老たる家を手まくら　尾張　只道

月すゞし誰もそのて川向れ　伊勢　道秋

すゞしさや旅の上れ山の月　陸奥　業石

すゞ風や江まれん有もちき　阿波　茶峯

涼風や一ツ家ハ三ッ家の風すゞし

納涼

すゞしさを添て買ふや扇子の　李天

淋しさの果てすゞしさ手足かな　浪花　海川

すゞしさに行もさまざや薮の面　武蔵　東花

あかれ咲くや涼しう夕暮る　江戸女　抱琴

涼しさや山抱きたんと夏に来て　汶里

すゞしさやいなをくる比寒ゆくて　木老

涼しさや小笠の投ぐる乞流し　秀郎

すゞしさや夏れうち汲汗男流　下総　孔栞

すゞしさとなりもいづれ山の家　桃川　琢考

今極る水にやあり夕涼　柳花

松の葉もよくさ尾は日すみけれ　女　千代

筏赤き急湍に出る夕すゝミ　曉臺

芦にのる工夫して見る涼ミ　多醸

網干の見るもありけり涼ミ　芸求

四ひらつかれさるゝすゝミ　蕉之

下すゝミ月記すまてハ木の葉ミ　罘叟

中しや人にこむ言語の下すゝミ　白雄

近のけて太の中をとるすゝミ　也有

秋ゆかん鷺師も見えて夕涼　几董

まれを招く玉むし尖涼ミ　仝

秣ふ男を見る士かすゝミかれ　傑吉

竹もとし夜もとし夕すゝミ　斗入

橋名ゝ人ハ秋寒きしりゝすゝミ　梅人

ふてゝ涼風ぞれあたら背　大江丸

涼ゝて人の姿なるに流藻　不昉

たのしさや竹をゑへて夕涼　武書

つすゝ塘も志るしおそのうち　姮九

そよ吹や枝抜下橋すゝミ　存亜

あるかしのすゝミ之案も禅　士朗

漁火をそへて燎かすゝミかな　仝

すゝミ身流のうきかれ之　丈左

うれて松に拠りすゝミかな　芳之

すゝしく柳に雲の戯るまで　之観

万代のさゞれしおるやすゞみ哉　菩来
前栽のこゝろにてもあり夕涼　如泥
人去れハ子ながなり川涼　定雅
門涼ミ人の蕣咲にけり　一菓
月のうへ續としもつ夕涼　仝
夜まくれは庭ふむ沓も猶すゞし　月化
母ありと偲ぶものありつゝすゞし　木海
夕すゞミ薬旅の火を掃きけり　寛松
そしらのゆくやされけり涼哉　蕉百
ま風に音のつよまてすゞしけり　嵩笠
杉の陰とものいはぬ人もすゞしけり　百池

逢阪のさゝらうちく夕すゞし　護物
発句する工夫もある下涼哉　鳥頂
うれ気をたもちて旅る涼哉　蓼斎
挽子化不さるもなり夕すゞし　女 志宇
百までも生るつもりや夕すゞし　菓也
あちこちら乳を求てくれつゝ涼　谷樵
聟るいふし孫藤又なそ夕涼　佐渡 路因
すむ所見れにて居るくもあれ哉　東 月叟
二ツ子を七弥に抱きてすゞミ哉　詠鴎
寝木も子育すんで門すゞし　佐渡 文路
川手のながれし松に夕すゞし　吾友

夏笠に石をのせつゝ夕涼　斗圃

涼しさは月ありけるを枕かな　（伊豆）雲鵬

麦藁の黄火さへ涼しいつまでも　（阿波）寄桂

風薫る中にれ柁は梢かな　保吉

風かをる蓮の植ゑた百の紅　仝

燈の入る書や風かをる　道虎

風かをる翁や鶏場の菜に絡仕　乙二

曙やうすく見ゆるは風かをる　鶯歩

風薫

冷水

掬ふ手も涼しや門の月　一葉

冷水来やくしてふを出れたり　（筑前）金花

清水

二人してむすべは濁る清水かな　蕪村

石工の鑿冷したる清水かな　仝

底のすむ砂さへ見えし清水かな　烏酔

山吹の花さへちりし清水かな　几董

撲多村の裳を流るし清水かな　仝

一すくひ呑ていのちのばし清水かな　百池

八九間苔を見えし清水かな　左明

立寄を見て追付はし清水かな　（佐渡）涼袋

住む人も其の節ゆかし清水かな　菫左

行あたり一本柳のきし清水かな　月樵

晰しさや清水のそばへ寄の石　（伊勢）石燕

立寄は鶏れちらする清水かな　五明

時もゝや清水の宵の小柄手　恒丸
露の笠春をちらしころ哉　士訪
草ふむハすゑあつくしころ哉　梓堂
兄やくと因れむし色通しころ哉　業兆
庭を押ぬ夜の露まや蓑しころ　完来
草の戸のほるしいつのしころ哉　年成
人も誠の末の下しころの多る青　素牛
常乾てつれ濡しなるしころ哉　尺芙
竟諸の気の余打くしころ哉　花高
清水の上ゐ気見て色わ松の分　蓑亭
荊ふまる葉の子かもるしころ哉　槿堂

たまるたゞまつ力さまさ清水哉　鴬笠
気分を見とゝけその二しころ哉　亜渓
君か代の山の分けさましころ哉　遥晴
此清水酒まさるハとも末のれり　三廉人
年ロハ夢のふかむ末の下しころ　万和
松風ところの手ふるしころ哉　漫て
乳よみくと草ふりする清水哉　久蔵
今をされハ身のかりしころ哉　女 寿々
枇杷の花のちる所と帰し蓑しころ　小尼
人分けの乳て古るしころ哉　湖舟
欝きも手すれハ古あなそしころ哉　菜鳩

ゆきゆけハこれ是より田の月夜　呉老
むすふ手も是良くさましくうれ　蒼嶠
松の木ハ清毛這の井ましころか　（筑後）双鳥
子のしころ沈む桜井の花にられ　（肥前）寛兆
樫の毛の融しうあるしころか　（備後）方壺
山清る澄きんの院とる　（播磨）桃杉
白雲やしころの毛けハ松しめく　去筇
晒井やさしつゞりて秀の声　百明
汲こし井や虎芽了毎の径て　蒐去
晒井やすゝしきゝのさ溜り　（肥前）寸車
さらし井やんすむ時るれ声　故按

晒井

麻地酒

ふりそゝや就さへ乃見ゆる麻地酒　（筑前）一掟

心太

心太さうしやん流河ニ手ヽ上　並也
心太溝へ仕さハ游くへし　（号）吐月
清見ゆる草に来さうれ心太　長高
出きる井や小魚と拾ふ心太　一葉
月に添ふ夜ハ月見よそ心太　寛松
余念なき日あてかへてそ心太　米年
日あたりや亭の見てある心太　善記

蓄氷

蓄みや下濯へ了塵を途成きしき　几董
蓄みにうつるて焼し光の良　並也
宇治は蓄みのふ大長なれ　仝

世捨ての心菊のまくらかな　陸奥　李枝

冷瓜

茄子や菜碗よりつゝるの上　京　車蓋

ゆきまで枕や瓜のひゝるまで　蒐左

山水の口に先やひやし瓜　盧風

人来たら蛙となれよひやし瓜　一茶

冰まく白一時やひやし瓜　琴二

道明寺

柳原ハ宮の寺ぬ道明寺　米英

冷汁

冷汁や鉢にたくふ空の華　尾張　箕十

水粉

水粉のすのふれ見る茶花垂　墨芳

水飯

水飯に枕ぬ鳴よ薬かな　伊勢　景山

水飯に浅漬かし二日酔　楳兄

水飯やさきにとし寄背戸の松　来虎

冷物

藻掻て月を近よるさやひやしもの　推己

干飯

干飯や雀さゝやく軒の妻　讃岐　鷺天

梅干

婆々しや梅干ほして一昼夜　道彦

香薷散

自らも藪におもゆる香薷散　今

蘇枝

豆桂る井にも卯月八日かれ　桂堂

漆掻

木のあかり光る眼さしや漆掻　芳角

前世いかなりもこそ漆の木　又明

枇杷

むつかしい葉も添かれ市の枇杷　東　瓜流

楊梅

やすりに盛く口を撰したり　紀ば　如凡

李

李られの赤い李をあつく小家　一菜

林檎

毘よの毘に喰ふをすまぬ哉　鶴老

百日紅

つや〳〵と月夜になりしりんご哉　米英

ちれハ咲〳〵して百日紅　女　千代

咲まさる花は百日にする日哉　百明

さるすへり秋に心のうつる也　其明

六月をふるつしめる百日紅　恒丸

鷺池蓮の新の蝶や百日紅　完来

百日紅月すきも咲ハ咲れけし　来　美守

三日月の出し出れ見たり百日紅　秋史

芳勝る日をたてるやさるすへり　常陸　嵐兆

夏柳

閑さらく夏柳基から良月哉　百明

夏柳のちるをるき夜か　白権

夏柳に火のかゝる前ハ欄干かな　丈左

夜柳

打よつゝ秋風ちりき夜柳か　兼右

鶯も小町も老る夜柳　白雄

夜柳月のねそも植さりし　米英

夜嵐し夏ゆく柳や風の筋　道彦

凌霄花

凌霄花に秋の近き風見ゆる　恒丸

凌霄やり日にてられ鳴かね　香　完来

慈姑

柳の名やとやましき夏寒　都雀

洪溜やりの入頭を風の来る　柳起

河骨

河骨や花あり人ハ誰ゝ栞　吐月

河骨や風にさからふ軽さ哉　栢翠
骨蓬や抜てり白きとりなる　芸老

菱花

鴫の巣を抱へて咲やひしの花　近江 逢旦
六月の水も見えてやひしの水　雉吼
白雨やひしハあつまりしの水　其爪

蓴菜

ぬなはハ茎る葉の流て月涼し　不眠

海松

手に辰の風見る海松の下ふ流　筑紫 楳醉

蘭花

ひらけしハ我れ蘭の花の露を秋のまへ　尼 素貞
蘭の花や娃弱子のゆかり　幽晴
蘭の花のちれても白の雫かな　伊勢 李東

夏草

夏草やさへ先道ある捨翁　菫古
夏草に探多の折まさらし　仝
夏草に高く流新たる夕暮れ　保吉
夏草や草れ小藤ハ花の咲　蹄石
夏草や一條ありて河原松　士語
夏草に高き男りし男かな　陸奥 鷄来
夏草に埋もるゝ垣ハ黒木かな　女 星布
夏草や鶏鳴り家ハ道の傍る　壽園
夏草や井まても汲ミに家二ツ　寛松
去志屋とをろふ行ゝし夏の草　此元
刈入て抵夏草ハうまれかな　秋支
風吹ハ白くも見えて夏の草　帰老

青芒　青芒すゞしき雲のはしのうへ　乙二

椅ちゝ厠の縁やあをすゝき　筑後　東野

忍冬　忍冬の花うちかゝる熊手かな　月樵

剪春羅　堀立れ繕ひけ衣や蔀能さく　道彦

釣鐘草　縁のより釣鐘草もうかれ　白雄

鷺草　鷺草や中から一根立てり　伊勢　素道

鷺草は上をも水の流れけり　武蔵　子尋

風蘭　風蘭の匂ひすむ也夏の光　二岸人

風蘭やあらし呉ずむ夕庵　芳老

風蘭の吸ひしたり松の露　蹊鷺

玉簪　玉簪花や土をさめけり雨の所　尾張　三伍

鴨足草　ゆきのした村雨のあとをはふ螢　京　とし於

葎花　花ならぬ名すてハなくて八重葎　道彦

おのれ香れ樋もなつすや葎さく　江戸　碧山

射干　射干ハうてて雉子のかくしかな　加賀　希因

紫蘇　さゝやかに卯月も暮る紫蘇の汁　京　吾仲

しそもあり夏菜にしうらかり　月化

さゝやかしにこぼれる紫蘇の露　左文

青鬼灯　房つりや子の悪草も青ほゝつき　吐月

赤芋　赤芋や夕日にきゆるみの影　竜学

麻　麻刈や白髪あるのまれならで　暁臺

背戸口に夕日透ふや麻畑　蝶夢

麻きるゝ女あはれや左袂　又昭
麻刈の麻なみなみこされハこそ　自境
麻赤く垣刈れに犯ね畠かな　保吉
きこへや石の折てに麻の露　去翼
麻畠や向ひの蝿か友そゝれ　瓦全
迷ひれハ麻の道ハ白れるまし　道堯
白の葉ひつど折今麻畠　寄岡
麻刈ハつれてきれる道かな　宝樟
鷺の沼て飛たり麻の露　三津人
迷ひれハ家もすこし麻の末　讃酒
女の児ホり越吹に麻すたりけり　月峰

麻刈て鶉素の歌ふ夜となりけり　秉和
麻刈て松風となる畠かな　讃岐　里閑
麻畑や白のとこれを招ねる　河内　沙王

藍刈　刈藍に十葉白く小百合哉　道喜
藍刈をとふなりとまて爺　久蔵

綿花　葉つよの雨を村人や綿の花　相模　巳水
雲ハまたやまりたれ畑や綿の花　讃岐　周白
類白の手折て見し綿の花　徽風
木ぶりにこれ咲や綿の花　銅羅

菊花　松の実に古くとつけれ菊の花　恒毛
菊花や猿ふかくしてやし蠖　英川

葛咲や嵐の山ゟ這出て　景兆
葛の花たをりし秋て月の兄する　葛三
うれしさも新茶もあて葛の花　奇闇
葛の花桜も夜たる木陰かな　唐人
葛花や入江の風の吹のぼる　大呂
吹まはす風きえ行し葛の花　琴松

夏萍

麦坂は夏萍の花流れ　恒丸
花もろとも夏萍の青かな　陝船

撫子花

撫子の茎つよきに岩の隙　如子代
昼顔やのり出て咲すその上　雲武
旋花やその庵の二十里　並歩
ひる顔や咲かず咲て恵しけれ　葛古
昼顔やまのふの花は日に見れ　系史
撫子や日影はひろく霧赤き　白雄
昼顔やとうれ雲も月に会ふ　世星
ひる顔の花は肩うき女かれ　其渡
昼顔の花に葉つる夜あるしれ　岱吉
昼顔やいそき黒の色に出る　尼諸九
昼顔や折も通さず白くして　春亜
昼顔も咲きわ蟹の前　圭川
昼顔や折かすの花に透も見れ　恒丸
昼顔や立延んとて友かなし　鶴路

昼皃は鶉の嘴をぬけにけり　文暁

昼皃や親の心をまいしらね　きせ

昼皃によく寄る人も松の陰　白柳

昼皃や草火焚跡より付て　道彦

昼皃は谷て見らるれ八重葎　一茶

昼皃と異人とその花する花　寄閑

昼皃の白にまつはるし山路かな　桂半

昼皃やうらもたのもし垣一重　万和

昼皃は肩と並ぶる走かな　来親

昼皃や家より起しおるの子の　右蟾

捷花やすそ風とさし橋はしま　淑井

夕顔

昼皃や万二軒敷の塀の上　芝山

昼皃は衰ふる花ておとろけり　菱雅

昼皃や蜻蛉の心しられね皃　雉啄

昼皃や花にくされる盆の月　（尾張）野喬

昼皃の蔓にひまる草もなし　芸支

昼皃に風吹かける木陰かな　（伊勢）興路

昼皃や茶の井まる所水脈　松江

昼皃の花や咲ける草の中　古節

夕皃や支婦して棚の盃派　多酥

夕皃や裸て疲る人の影　仝

夕皃の花子もむら雀かな　暁台

夕㒵の風立されて居ぬ蝿　仝

夕㒵の宿や門田の扇屋と　莚左

夕㒵の花とも猫や余所心　菱市

夕㒵や花に嵐の宿すまゐ　百波

夕㒵や風のゆるめて極ハなし　白椎

夕㒵やむかしハ髪も白かりし　（尾張）烏秦

夕㒵もこれむかし風の葬ふ　岱青

懸おけハ夕㒵ハ家来子と　仝

夕㒵やおかつれし割木取衣　（甲斐）東里

夕㒵や子れ言てゐる門疑　（備中）松浚

夕㒵や今に白いをさ改めん　大江丸

夕㒵や畑で宿かりした人　存亜

夕㒵の花の蔭守の料理かな　騏六

夕㒵のとのハ造眠にまさる之　古翠

夜よりも夕㒵淋しみなり絶　木僊

夕㒵や余所の光する稲光　葉兆

夕㒵や咲の名毛の酒きすて　米英

夕㒵や雀の廓る蔓の中　方与

夕㒵や浴をさゝる戸一枚　年仏

白き居し夕㒵花にかゝり　完来

立寄れハ夕㒵咲る芋の上　岳輅

夕㒵や文まて見しる垣の外　桂壹

むしろゝ夕皃の咲ハ戸口の風　蓑子
夕皃や二布かくしも垣のまゝ　寛松
夕皃に戸口も見えん月細し　其米
夕皃やうつり泣する夜のかすり　紫明
夕皃や光来たゆる蟾の声　（尾張）すゞ
夕皃の花しらむ小路月夜　（越）家鶴
夕皃に作られたり烏帽子折　梅史
夕皃や深て立る世ハ安し　長寸
夕皃やこし茶たる廾柱　海川
夕皃の蹲もあれ葉なか小　（伯耆）帰来
夕皃や苫を垣に人絶し　汲里

夕皃の風ハ道にかゝりけり　（丹後）孫芳
夕皃ハ瘦て甲斐ある花かし　（下総）支孝

青酸

むさ苑にくしおそれて青酸　一葉
月影にかゝる藁花青酸　（安藝）嘯二

豇豆

豇豆や世ゝむさし家のかゝる　（江戸）政二

新麦

新麦や芽ハ九月の利久垣　一象

小麦藁

鳩鳴るさなや垣根の小麦藁　柳也

瓜

きりそて瓜もく新のかゝりかな　菫左
相まくら瓜くふて女の風　無求
瓜の花に狐嘯る月夜の風　白燿
瓜畠てり烏にこたふるかな　不昨

瓜盗む人へや月夜の出来心　重厚

瓜くハりして呉たり隣の露　蒼虬

瓜の皮ハ蒸てやれ小鶏に　蕢守

花れまふ花やさとせの瓜作　桂雀

初瓜ハ三日かゝる畑の礼　呉芳

冷瓜

冷瓜をとまれハ夜明の月に　喜岐

甜瓜

たゞちるは中にふるまふ初真桑　東丈

真桑むくまえ出しハや宗に　蝶夢

そのしうきてまれになりし真桑瓜　百明

蔓ながら粒へかゝる初まくは　白雄

南瓜

南瓜もとり落たりて粒こぼれハ　木僊

鷹羽習

羽ならしにならハ宇京れ松の鷹　護昌

遊鶴

業にならぬ麦刈しかれ珠を着　鋪雪

夏虫

片羽燃て飛ありくる夜の古　果文

池火に蚊よといひしも夏の古　白雄

火より火と又火となして蚊ちかより　暁臺

夏虫や蚊つれ来る惣清子　百明

扨もくすぶれくなしね火より古　綺石

源さまて古の羽甚れ蚊帳に　旺丸

火よりもこゝ夜かりて帰りける　蒋笠

火よりも涼しる付てあそびたり　岸虎

芋の戸のひつあり打火より古　九紀

雲

火より出て扨あらしてあまりけり　鶯笠

ひら扇は蕣のとも之火より雲　寄聞

芋花や金銀つかむ秋つ雲より雲　素迪

橋の雲まで末さへ火より雲　蓼亭

文月や現に落る火より雲　渭求

紅雲にかれと飛ぶ火より雲　芝山

万葉の解のふしや文の雲　作丸

雲さへ返すも仏や唐にとしきそ　暁甚

高ければ見送る雲に月来る　菴古

雲に遊ぶ蛍の尾や文ひとり　百明

雲拾ふ子ら花秋の月夜かな　定学

杉の花さく間にある雲に江月かな　大江丸

松風に出て吹けや雲の沢　順丸

碑読のんや雲に抱かれ　只笑

雲となりて見よ紙の月は出におもり　米翁

よい月や雲をねてきそ踊る雲そ　一業

雲掃や肩くの紅かけ　獲物

海棠に雲浮てなし雲の沢　回人

雲揺る舩は流山の西へなり　梅價

雲をも見るとはなし乳母の月　近江　宇淨

七尺の屏風もこれ乳床の雲　上総　久栢

雲のあたり急きすすむ人はなし　以守

蛭

君指へたくれてのりし蛭の声　李共

逃るも分つをちぎる足の蛭　上総 如柳

蛭の尖や笈川あその溜り哉　寛来

梶の木に蛭もすまぬる土乃のけり　仕しめ

蚰　毛虫

蛤しさん休めハ柄のたりかり　陶更

いとしさの毛虫とりつく端居かな　几董

軒寄ハ毛虫落るる木下かな　都雀

これ係しと打たる枝の毛虫かな　丈左

さ葉や竹のいたみたる毛虫　一蕙

松風や茶巾のたる信女毛虫　武蔵 可見久

紙魚

赫奕姫紙魚のりまそ光来り　乙二

金亀虫

学ひとや長者となりてかね虫　茂秋

鵜

鵜られてよそ迄り夜半の川　芸お

鵜籠て家の幸さや鵜の仕ら　道光

世の流れ出るも見る闇の鵜　護物

つる鵜の綱はまるも月夜かな　信夷 未芜

川狩

川狩や磯の網かれる筍の篠　自禎

川狩や乗本を引し家の家　保吉

川狩や罷も添見逃す辛の　大江丸

畚もちハ数子しめる夜河かな　道光

河狩れ深めりや出ら木立　一菜

河狩の肩投返も笄かな　笠斧

小鯛

何枝や柳に出る坂ふり　月坊　菜芸

つ雨宅の端ゟ来る小鯛売　芦人

鯖釣

錆つくや木部火にも流の上　球夢

海月取

膾を押れもおそろしさに近　可銀

沖鱠

沖鱠あやまちありていさぎよし　暁臺

旅人の気違ひよりぞ沖鱠　蓼太

手のひらに動きありけり沖鱠　常陸　村江

祭

児あそぶ宿の菖蒲も祭かな　白雄

葵かけし庭や祭の小昼かな　道彦

自花じらね勢ひや又祭　長翁

五松やえし祭の赤宥　一茶

夏神楽

晴しさを沖見ほりし祭かな　久臧

禰宜に神楽はりおとし夏神楽　芸芳

月祈使

巫髪の揃目うつくしくゑ使　律大

夏月きれより使や芳男　京　芹舟

御祓

夏きさして命晴しき御祓かな　樗良

人去て淋しくなりぬ御祓河　蓼太

木の端に名書たる御祓河　仝

夏の夜は恋も手まるるや夏祓　芸芳

はくたかむら祢宜てすむ御祓かな　仝

たえまの流も御祓の夜　白雄

蓬見えし夏の夜すみ御祓かな　保吉

笹の葉にちらす御祓のしづくかな　松兄

御祓してきよき衣の袂かな　士朗

子にさへ芦を手折て御祓かな　仝

芦分し道の出来たる御祓かな　芳之

酒盛もあすまてこされ御祓河　米艾

涼しさや灯ほそくて御祓の夜　萬之

御祓さへはしやく人に小の月　豊半

御祓して見れば匂ひて菓の葉　乙亮

御祓は夜七夕姫も掃石に　仝

灯籠のきえれ花さく御祓かな　一菓

光信か画にあるまゝのみそぎかな　幽嘯

晦の[illegible]道る跡夕祓　序人

御祓して[illegible]たる袂かな　素迪

涼しさは嘘のいづれね御祓かな　莆斐

御祓して[illegible]夜ハ　石海

篠吹をとられてゆく御祓かな　（康寿）白気

御祓すみ[illegible]御祓河　双瀬

川社

梢に[illegible]のより川社　白尼

[illegible]に[illegible]川秋　漫て

形代

形代や男女のしるしあり　（樵隠）樵叟

形代をとく吹かせ荻芒　一菓

茅の輪

[illegible]茅の輪かな　岱青

子をつれて芦の節をくゞる夏野かな　大江丸

二夜月まだ苗へむけゝる芦の端かな　方升

あつまるんでわけゝるちんの王かな　雨翠

ほうつて夏草もわけんちんのまかな　不騫

白雲や七夕の王子しりし人の上　乙二

きらしられ雛の合ハちんのまかな　岳輅

昼寐

昼寐覚て松風に狗の遠音かな　保吉

夏の夜をたす毎日の枕かな　撲史

あちこちや昼寐起ると八ツなり　道花

夏痩

夏痩の氣骨揉る寐覚かな　萱古

夏痩や別して寐の膝にゆく　表涛

夏痩ハ男らしさもなかりけり　春栗

夏痩やけさ咲初し白木槿　浪花 松濤

夏雲

槿山を出離して夏の雲　之唐人

夏の雲くずれ白鷺と成にけり　鳥項

夏山

夏山の西一色に請にけり　保吉

夏の山つゞりの刹青さやかなり　又昭

夏雲の又重なる嶺山かな　桓丸

傘に余りてこぼる夏の山　米英

あふぎやしなる魚くゞる夏の山　菁之

夏山を見て立寄の山かな　浪華 南山

夏の山大石落し寒かなり　娯舟

夏山や紫つゝし遅さくら　道彦
夏山や所々なる青の内　仝
夏山や鳥の啼に国境る　右橘
夏山や灯燈提て下諏訪の宿　（女）凡秋
夏山や女にまけて松走し　（豊）圭流
夏山や月は仏の上をゆく　（越）鶴秀
夏山や塚に追る鳥の子　松白

夏野

麦刈て久し薫る夏野かな　暁甚
牛馬に一筋ぬれる夏野かな　士朗
夕陰にかくし夏野の雉子かな　恒丸
そらまめの豆こぼれけり夏野かな　米英

夏川

燕も虻に急る夏の川　甘谷
川越る跡に風あり夏の川　完来
舟あるも又舟もなき夏の川　月居
一すぢの鵜に流る夏の川　手馬
夏河や魚にまじりて小蛙泳　雲江
夏河や堤にすゞむ舟の嫗　鶴路
夏河や蛙の声もさゝたなし　恒丸
夏河の末見て戻る月夜かな　尺艾
夏河や夜に入れは涼しさに　（信州）左角
夏河の夕日打るも行人　江鷺
夏河や米炊て流る大男　（下総）素陵

夏海

夏の海一際ての嵐かな　讃岐　桃里

夏の海入日しつれうつりけり　筑後　玉壺

夏水

すのこ見ゆやたゝ流ても夏の水　升六

さりあへて見て仕舞けり夏の水　嵩之

蝶て後ろすゝすへらかり夏の水　諸陶

ちよろ〳〵と夏ハゆるそ山の水　素櫨

秋近

秋近うすゝしや横ふ天の河　芦　嵐六

秋近きり浪のかろけ寐し　平角

梅近き山路や松を見れさん　護鶴

提子に秋近き夜と旅にけり　甲斐　鏡平

秋もはや月近き鶴の額かな　雨考

晩夏

夏果や鳥にかりし手かれ子　水鳧

勝夏

月夏のましく出る夕かな　保吉

晩夏立秋

手を出す月も杉の入翁て萩の芽　恒丸

そのまゝに秋になるそ養　蓼太

夏雛

夏さんれ日ふれてそのまいそく之　大江丸

今晩し月の橋ほとすゞし　可都里

花ま奉人の三日四月かな　樗堂

夏など人見見るゝ文かな　米英

曙や一輪牡丹ほこらすゝ　嵩之

夏霧しかくれ見の東れ　吉牛

山の辺ハ夏もやすらぬ蓼しかな　道彦

入もの嬉しき文と来にけり　陽子

山櫻や古葉ちらしに文こぼり　寛松

ゑりかゝる文にするとゐ筆　去卯

何であやかはらるゝ文の表　維咏

文めくや檜を木陰の耕地の子　碩全

文箱ハ文のまゝく敷　紀　惟孚

村るハちかつまれれと文ハ来る　清撰　斉解